

大阪府立千里高等学校

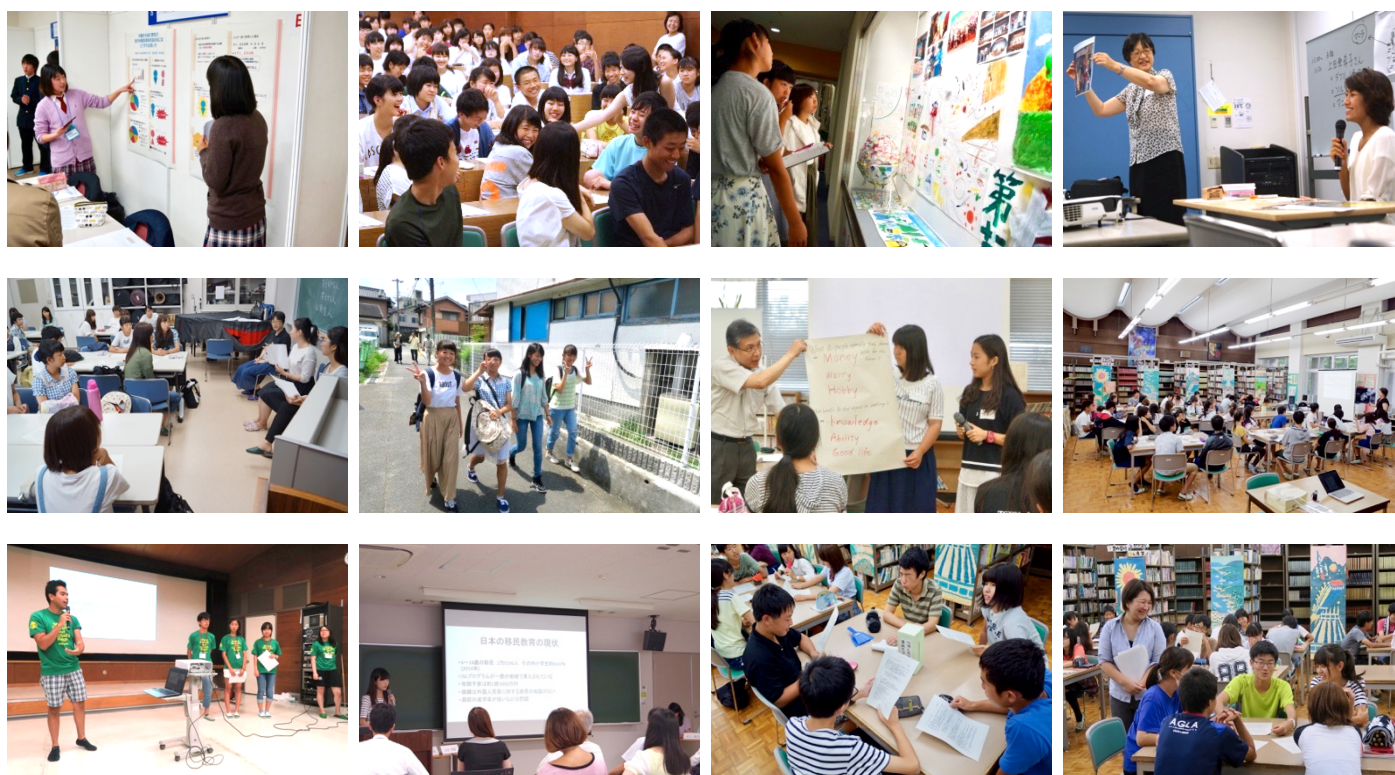
共有と前進のための

SGH研究開発

実践レポート2016



スーパー グローバル ハイスクール



Preface | はじめに

本校は、昭和42年に普通科高校としてスタートし、平成2年に国際教養科2学級を並置しました。平成17年の国際・科学高校への改編を機に、本校は、次の新たな指導法の研究開発に取り組むこととしました。

- ① より多くの生徒が高い水準の国際性と語学力を獲得するための指導法
- ② 総合科学科における指導法
- ③ 文・理両方の学力と、それぞれの専門性を高めるための指導法

そして、これまでの指導法を改良するとともに、スーパーサイエンスハイスクールをはじめ、国・府の研究指定等の活用を図ってまいりました。

平成27年からはスーパーグローバルハイスクールの研究指定をいただくことができました。将来のグローバル・リーダーを育成するため、次の教育課程・指導法を開発することとしました。

- ① 課題研究の研究領域として国連グローバル・コンパクトを取り上げるとともに、ステークホルダーがWin-Winの関係となるよう柔軟かつ創造的な提案を行える力を育むための教育課程
- ② 高い社会貢献意識と高いレベルのコミュニケーション・ツールとしての英語力を向上させるための指導法

本校は、課題研究の質を高めるための手法として、国連グローバル・コンパクトに参画する企業とNGOそれぞれの視点と取組みの比較、及び、日米の比較という枠組みを設定するとともに、課題研究の導入・展開・まとめの各段階において、連携機関より具体的な指導・助言をいただくよう工夫しました。また、国内外における研修の質が段階的に向上するよう計画を立てました。

指定2年次の今年度は、昨年度の経験の上に立ち、1・2年次の課題研究の指導法についてさらなる質の向上と協力機関との連携の充実を図りました。また、積極的に先進校を訪問させていただき、論文指導・海外校との交流・アクティブラーニング・ICTを用いた授業等、次年度以降の指導の充実に向けての情報収集に努めました。本報告には、それらの記録、及び、本年度の取組みのアウトプット・アウトカムを収めております。多くの皆さま方にご一読いただき、忌憚のないご批判・ご意見をいただければ幸甚に存じます。

最後になりましたが、本校の取組みを支えていただいている運営指導委員の皆さま、課題研究の質の向上のため多大なご支援をいただいている大阪大学及び関西学院大学の先生方と事務局の皆さま、国連日本政府代表部、国連グローバルコンパクトネットワークジャパン、Anti-Defamation League、アジア太平洋人権情報センター(ヒューライツ大阪)、大阪中小企業家同友会の皆さま、そして、Tanya Odomさんに対し、心よりお礼申し上げます。

本校としましては、多くの方々のご批判・ご意見を真摯に受けとめ、生徒が高い志を胸に文・理両方の学力と専門性を高め、時代を切り拓くグローバル・リーダーへと羽ばたいてくれるよう、引き続き全力で取り組んでまいります。

平成29年3月

大阪府立千里高等学校

校長 松本 透

Contents | 目次

I. 本校の研究開発構想の概要(抜粋)	3
(1) 研究開発構想名	3
(2) 研究開発の目的・目標	3
(3) 研究開発の概要	3
(4) 学校全体の規模(平成 26 年度現在)	3
(5) 研究開発の内容等	4
(6) 研究開発計画・評価計画	7
(7) 研究開発成果の普及に関する取組	10
(8) 幹事校としての取組	10
(9) 研究開発組織の概要(経理等の事務処理体制も含む)	10
II. 実践報告	12
(1) 1年生対象の SGH プロジェクト 年間指導経過	12
(2) 1年生課題研究「探究基礎」	13
(3) 1年生対象「国際理解」特別授業(1)	16
「高校生の日常と国際的な課題のつながり～パーム油とチョコレート」	
(4) 1年生対象 SGH 講演会	17
「国連職員になりたい私が、高校生の時に知っておきたかった4つのこと」	
(5) 1年生対象 夏季フィールドワーク研修「GLOCAL SEMINAR」	18
(6) 1年生対象「国際理解」特別授業(2)	22
「西淀川の公害問題解決の軌跡から多様な立場と合意形成について学ぶ」	
(7) 1、2年生対象 秋休み企業・大学訪問研修	23
(8) 2年生対象の SGH プロジェクト 年間指導経過	25
(9) 2年生課題研究「探究」	26
(10) 2年生対象「探究」講座への大学院生訪問指導	31
(11) 2年生対象 ニューヨーク研修 ～DIVERSITYとINCLUSIONについて学ぶ	32
(12) 1,2年生対象 学習成果発表会「千里フェスタ」の概要と「探究」の発表	34
(13) 国際文化専門科目:課題研究を支え、英語コミュニケーション力を高める	35
(14) 成果の普及	38
(15) SGH 運営指導委員会: 助言を中心に	39
(資料①) 国際文化科今年度入学生の教育課程表	41
(資料②) 「探究」研究題目一覧	42

I. 本校の研究開発構想の概要（抜粋）

(1)研究開発構想名

グローバル・マネジメント力を備えたリーダーの育成計画

(2)研究開発の目的・目標

1) 目的:

国際的な課題について、ステークホルダーがWin-Winの関係となるような提案を行う力であるグローバル・マネジメント力を備えたリーダーを育成するための教育課程の研究開発。

2) 目標

生徒に対し、次に掲げるグローバル・マネジメント力を育成することを目標とする。

- ① 高い社会貢献意識
- ② 国際的課題についての多面的な視点と深い理解
- ③ 国際的課題について他者と連携・協調しつつ探究する力
- ④ ステークホルダーがWin-Winの関係となるよう柔軟かつ創造的な提案を行う力
- ⑤ 高いレベルのコミュニケーション・ツールとしての英語力

(3)研究開発の概要

- ① 課題研究の研究領域として国連グローバル・コンパクト(以下、GC)の4分野(労働, 環境, 人権, 腐敗防止)を取り上げ, GC参画企業とNGOの取組の比較, 及び, GCの取組に係る日米比較という手法により多面的な視点を育むための指導法を研究開発する。
→立場や利害が対立する領域を課題研究の対象とする。
- ② 国連・大学・企業・NGOと連携し, フィールドワーク等を通じ研究者・実践家の生き方に直接触れることにより, 高い社会貢献意識とGCに係る深い理解を育むとともに, 高いレベルのコミュニケーション力としての英語力を向上させたための効果的な研修計画を研究開発する。
→国際的課題に取り組む大人の姿に触れる
- ③ 生徒が互いに協力しながら連携機関等より適切に指導・支援を受け, 必要な情報を収集・分析・整理する力を身につけることができる指導法を研究開発する。
→外部の教育資源の導入と論理的思考を促す指導法の研究
- ④ 上記①～③を通じ, ステークホルダーがWin-Winの関係となるよう柔軟かつ創造的な提案を行える力を生徒に育むための教育課程を研究開発する。
→3年間で、「知る」、「調べる」、「提案する」へと発展させる学習場面の提供

(4)学校全体の規模（平成 26 年度現在）

全日制の 課程	第1学年		第2学年		第3学年		計	
	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
国際文化科	159	4	161	4	155	4	475	12
総合科学科	160	4	158	4	157	4	475	12
計	319	8	319	8	312	8	950	24

(5)研究開発の内容等

1) 全体について

A. 現状の分析と課題

本校においては、国際文化科における課題研究の質を向上させ、国際的課題に高い関心をもつ人材育成の裾野を拡大するとともに、グローバル・リーダーを育成することが課題である。そのため、国際文化科における課題研究の領域に国連グローバルコンパクト(GC)4分野を取り入れ、GC課題研究コースを設置する必要がある。また、1・2年次についてはそれぞれの発達段階に応じたテーマを提示すること、3年次については英語で発表・討論するための選択科目を拡大することが必要である。加えて、本校がSSHにより研究開発してきた、課題研究停滞期における指導法を応用することが必要である。

B. 研究開発の仮説

仮説1. 国際文化科の生徒を対象とする。課題研究が本格化する2年次以降については、GCに係る課題研究のコースを設置し、同コースを指導する教員チームを組織することが必要である。また、生徒の主体性を育みつつ、発達段階に応じたテーマを示す。それにより、グローバルな課題に対する高い関心と深い理解をもつ人材育成の裾野の拡大とグローバル・リーダーの育成を共に達成することができる。

仮説2. GCに関わるステークホルダーそれぞれの利害関心について学び、企業とNGO、及び、日・米の取組について生徒が比較対照するとともに、地域の企業家等の支援を受け、実生活との関わりの中で課題研究を行う仕組みをつくる必要がある。それにより、現実に即した、柔軟かつ創造的な提案を行えるようになる。

仮説3. GCやグローバルな課題に取り組む人たちと直接触れあう機会や見学・実習を多く取り入れることが必要である。特に、中間発表会後の研究停滞期にそうすることにより、生徒はモチベーションを維持するとともに進路や生き方について思索を深める。

仮説4. 互いに切磋琢磨するようなリーダー層を育て、他の生徒を牽引する仕組みをつくる必要がある。そのことにより、優れた意欲・能力を有する生徒を育成・支援することができるようになる。

2) 課題研究について

A. 研究領域

GCの4分野である「人権」「労働」「環境」「腐敗防止」を設定する。この研究領域は、本校がすでに国際文化科の課題研究において多くの生徒が取り上げてきたものである。この領域を明示することにより、生徒がこれまで以上に具体的にテーマを設定することができ、研究の質が向上すると考えている。

B. 連携機関、及び、連携の内容

○課題研究においては、次の機関等と連携する。

- ・ 国際連合日本代表部(以下、国連)
- ・ 大阪大学国際公共政策研究科(以下、阪大)
- ・ 関西学院大学「国連ユースボランティア」派遣日本訓練センター(以下、関学)
- ・ グローバル・コンパクト・ジャパン・ネットワーク(以下、GCジャパン)
- ・ アジア・太平洋人権情報センター(以下、ヒューライツ大阪)
- ・ 大阪府中小企業家同友会北ブロック(以下、同友会)
- ・ Anti-Defamation League(反中傷同盟。以下、ADL) (これらの機関等を総称し以下、大学等)

○連携の内容については、次の通りである。

- ・国連…本校5期生の沼田隆一氏(元国連開発計画勤務)と連携し、ニューヨーク研修時に、日本代表部より国際的な課題、及び、GCについてご講義いただく。
- ・阪大…蓮生郁代准教授にご協力いただき、年度末に実施する課題研究発表大会においてご指導・ご助言いただく。また、同研究科が主催する次の行事等についてご案内いただき、本校生に参加させる。
 - ① 国際的課題に係る講演会
 - ② サマーキャンプ(全国高校生を対象とした国際的課題についての宿泊研修会)
 - ③ 高校生を対象とした国際公共政策学会、等
- ・関学…同大学「国連ユースボランティア」派遣日本訓練センターと連携し、開発途上国等においてボランティアに取り組んだ学生によるご講演、及び、本校生の課題研究へのご指導・ご助言をいただく。実施時期については、中間発表会以後の課題研究の展開・発展期とする。
- ・GCジャパン…同事務局を通じ、団体として本校生の課題研究に対しご指導・ご助言いただくことについてご承認いただいている。複数の企業のご担当者より、それぞれの具体の活動についてのご講義、及び、課題研究中間発表会におけるご指導・ご助言をいただく。
- ・ヒューライツ大阪…ジェファーソン・プランテリア氏(主任研究員)と連携し、本校1年生対象に、約5日間の研修会(日帰り)を実施することとしている。テーマは、GCの意義、市民の立場からGCに期待するもの、及び、優れた企業の取組についての紹介である。また、中間発表会において指導と評価もしていただく。
- ・同友会…同北ブロック事務局を通じ、中間発表会以後の課題研究の展開・発展期において、本校生による企業訪問受け入れ・フィールドワークと、インタビュー等に対するご指導をいただく。
- ・ADL…ニューヨーク研修時に、多面的な視点をもつことの意義、課題研究チーム等集団内の協力関係を高めるためのスキル等について、参加体験型学習によりご指導いただく。また、ニューヨーク研修においては、ターニャ・オダム氏(Global Diversity and Inclusion and Education Consultant and Executive Coach)と連携し、生徒が、GCや企業の社会的責任(CSR)推進に取り組む米国企業を訪問し、フィールドワークやインタビュー等を行えるよう企画する。

C. 各学年の課題研究

【1年次】

・課題研究の目的

- ① 課題設定から論文作成までの指導法の研究開発。
- ② 国際文化科の生徒160名全員の、グローバルな課題と、GC、及び、研究領域に対する知識・関心を向上させること。
- ③ グローバルな課題とGCについて高い関心をもち、課題研究において優れた意欲・能力を有する生徒を育成すること。

・仮説との関係と期待される成果

生徒の自発性を育みつつ、1年次の発達段階に応じたテーマを設定することにより、限られた時間内に質の高い調査研究が行えるようになる。また、課題設定から論文作成までの知識・スキルが向上するため、課題研究の質が向上する。

- ① 企業の取組とNGOの取組を比較対照させることにより、課題研究の質が向上する。
- ② 1年生全員がグローバルな課題とGCについての基礎知識を獲得するため、グローバルな課題に対する高い関心と深い理解をもつ人材育成の裾野が拡大する。
- ③ GC課題研究コースを設置し、同テーマに対し意欲関心のある生徒を集めることにより、将来のグローバル・リーダーを育成・支援することができるようになる。
- ④ 中間発表以後、研究停滞期において、同友会等関係者へのインタビューを行わせることにより、生徒のモチベーションを維持させることができる。また、リーダーとしての自覚が高まり、将来のグローバル・リーダーとして成長する契機となる。

【2年次】

・課題研究の目的

- ① 課題研究と発表の質を高めるための指導法の研究開発。
- ② GC課題研究コース生徒のテーマについての理解をさらに深めるとともに、大学等関係者と連携し、情報収集や先行研究について調査したり、チームをうまくとりまとめたりするなど、マネジメント力を含む課題研究のスキルアップを図ること。
- ③ 特に高い関心をもつ生徒をリーダーとして育成・支援すること。

・仮説との関係と期待される成果

- ① 生徒の自発性を育みつつ、1年次より難易度の高いテーマを設定することにより、生徒のモチベーションが高まるとともに、限られた時間内に質の高い調査研究が行えるようになり、課題研究の質が向上する。
- ② 企業の取組とNGOの取組に加え、日米の取組を比較対照させることにより、課題研究の質が向上する。
- ③ GC課題研究コース・リーダーを中心に、国連本部、ADL等における研修を実施することにより、リーダー間の連帯感が強まり、課題研究に対するモチベーションがさらに向上する。
- ④ 中間発表会以後、研究停滞期において、同友会等関係者へのインタビューを行わせることにより、生徒は、進路や生き方についての思索を深めるとともに、課題を実生活との関わりの中で探究できるようになる。
- ⑤ 3月に、GC課題研究コースの優秀チームをADL等に派遣し、インタビュー等を行わせることにより、グローバルに活躍したいというモチベーションをより高めることができる。

【3年次】

・課題研究の目的

- ① 3年次の選択科目として、平成28年度に「グローバル・スタディーズ」を新設するとともに、生徒が課題研究の内容について英語により発信・提案し、討論する力を育むこと。なお、指導教員はGC課題研究コース選択生徒に対し、同科目、あるいは、既存の「トピック・スタディーズ」を選択することを促すこととする。
- ② ADLと連携し、米国において発表・提案、討論する機会を設けるよう努め、生徒が海外の志を同じくする企業・団体関係者とネットワークを築くことができるようにすること。
- ③ 阪大の国際公共政策学会をはじめとする研究発表会、GC等が主催する研究会等に参加するよう努めるとともに、全国の志を同じくする企業・団体関係者とネットワークを築くことができるようにすること。
- ④ TOEFL受検者を40名以上とし、海外大学へのダイレクト進学者を複数名出すこと。

・仮説との関係と期待される成果

- ① 3年次の選択科目の中に、「グローバル・スタディーズ(GS)」(2単位)を新設する。目標は、国際的な課題をテーマとして取り上げ、高度な英語によるコミュニケーション力を育成することである。本校にはすでに、同じ指導法を用いている選択科目「トピック・スタディーズ(TS)」(2単位)があり、例年20～40名が選択している。今回、GSを新設することにより、グローバルに活躍することを目標とする生徒層が拡大する。
- ② 「GS」と「TS」といった授業において、GC課題研究コースのテーマを取り上げることにより、同テーマについての思索が深まるとともに、発表・討論等を行うために必要な高度な英語力を習得できる。

3) 課題研究以外の取組

A. 学校設定科目「グローバル・スタディーズ」の新設

3年次の選択科目として、平成28年度に「グローバル・スタディーズ(GS)」を新設し、国際的な課題やGC課題研究コースのテーマについて、高度な英語によりプレゼンテーションや討論を行える力を育成する。また、TOEFL iBT等を活用した指導を行う。

B. 「トピック・スタディーズ」でGC等をテーマとすること

3年次選択科目「トピック・スタディーズ」の指導項目の中に、国際的な課題とGC課題研究コースのテーマを基にした、英語によるプレゼンテーションや討論を取り入れる。

C. ICT機器等を活用した反転授業と教科指導

1年次「英語文法」・2年次「英語ライティング」において1年間の授業映像を製作し、反転授業を実施。英語・国語・地歴公民・理科等においてICT機器・視聴覚機器を効果的に活用する。

D. グローバル・リーダー育成に関する環境整備, 教育課程課外の取組内容・実施方法

・ 全員対象海外研修旅行の実施

引続き、国際文化科の全生徒(160名)に、2年次、オーストラリアにおいて、5日間のホームステイを軸とした研修旅行を実施する。

・ 国際理解講座の開催

1・2年次に、国際文化科の生徒全員を対象に、JICA職員等を招き、国際理解講座を行う。平成26年度については、ハワイ大学教授を招き、講演会を実施した。今後引き続き、外部講師による研究会等を実施する。

・ 海外の高校生との交流

長・短期留学生を積極的に受け入れる。(毎年30名以上)ハイスクール・ディプロマッツ交流(全米選抜生徒との交流)、大阪府カリフォルニア友好交流(日本語を学習している生徒との相互交流)、日仏高校生交流(フランスの日本語・日本文化を学習している生徒との相互交流)等、海外高校生との交流と討論会を実施する。今後、以上の取組を継続する。

(6)研究開発計画・評価計画

1) 第一年次(2015年度)

A. 研究開発計画

① 課題設定から論文作成までの指導法の研究開発

a. 「探究基礎」の教育課程における導入部分(「気づき」「課題設定」「調査計画」)について平成25年度開発したものを改善するとともに、後半の指導法について検討し、策定する。

- b. 「探究基礎」及び「探究」の教育課程におけるGC課題研究コースに係る指導・支援方法について検討し、策定する。
- c. GC課題研究コース選択生徒が80名以上となるような働きかけ方について研究する。
- d. 中間発表会以後の「停滞期」における指導法について研究開発する。
- ② 大学等との連携計画についての相談と調整
 - a. 大学等との連携について、関係機関と調整し、年間計画を作成する。
 - b. グローバル課題・GCについて、指導教員対象の研修を実施する。
 - c. GC課題研究コースに意欲・関心を有する1年生約10名によるニューヨーク研修を実施するとともに、現地において国連・ADL等と研修内容について協議する。
- ③ 「GS」の指導法、及び、「TS」におけるGCの導入方法の研究開発
 - ・「GS」の指導法、及び、「TS」におけるGCの導入方法を研究開発する。
- ④ 国際性とコミュニケーション・ツールとしての英語力を向上させる取組
 - ・国際文化科の海外研修が質の高いものとなるよう計画する。
- ⑤ 「探究基礎」に係る実践等の英語版報告を作成し、学校ホームページにアップロードする。

B. 評価計画

- ① 課題設定から論文作成までの指導法の研究開発
 - a. 「探究基礎」「探究」の教育課程、及び、GC課題研究コースに係る指導・支援方法、中間発表以後の「停滞期」における指導法が策定できたかどうかにより評価する。（「探究」については、平成27～28年度の2年間で開発する。）
 - b. GC課題研究コース・リーダーを発掘できたかどうかについて、指導教員による観察等により評価する。
- ② 大学等との連携計画についての相談と調整
 - ・大学等との連携計画について策定できたかどうかにより評価する。
- ③ 「GS」の指導法、及び、「TS」におけるGCの導入方法の研究開発
 - ・「GS」の指導法、及び、「TS」におけるGCの導入方法を開発できたかどうかにより評価する。（平成27～28年度の2年間で開発する。）
- ④ 国際性とコミュニケーション・ツールとしての英語力を向上させる取組
 - ・国際文化科の2年次の海外研修が高い質となるよう計画されたかどうかにより評価。
- ⑤ 「探究基礎」に係る実践等の英語版報告を作成し、学校ホームページにアップロードする。
 - ・「探究基礎」に係る実践を中心とした英語版報告が作成され、学校ホームページにアップロードされたかどうかにより評価する。

2) 第二年次(2016年度)

A. 研究開発計画

- ① 課題研究と発表の質を高めるための指導法の研究開発
 - a. 「探究」の教育課程、及び、GC課題研究コースに係る指導・支援方法、中間発表以後の「停滞期」における指導法について検討し、策定する。
 - b. 第二年次におけるGC課題研究コース・リーダーに対する指導法について策定する。
 - c. 第二年次の中間発表以後の「停滞期」における指導法について研究開発する。

- ② 大学等との連携計画についての相談と調整
 - ・米国研修について、調整し、年間計画を作成する。
- ③ 「GS」の指導法、及び、「TS」におけるGCの導入方法の研究開発
 - ・「GS」の指導法、及び、「TS」におけるGCの導入方法を開発できたかどうかにより評価する。(平成27～28年度の2年間で開発する。)
- ④ 国際性とコミュニケーション・ツールとしての英語力を向上させる取組
 - ・国際文化科の海外研修旅程、及び、事前指導計画を作成する。
- ⑤ 「探究」に係る実践を中心とした英語版報告を作成し、学校ホームページにアップロードする。

B. 評価計画

- ① 課題設定から論文作成までの指導法の研究開発
 - a. 「探究」の教育課程、及び、GC課題研究コースに係る指導・支援方法、中間発表会以後の「停滞期」における指導法が策定できたかどうかにより評価する。
 - b. GC課題研究コース・リーダーを発掘・支援できたかどうかを、指導教員の観察等により評価。
- ② 大学等との連携計画についての相談と調整
 - ・大学等との連携計画について策定できたかどうかにより評価する。
- ③ 「GS」の指導法、及び、「TS」におけるGCの導入方法の研究開発
 - ・「GS」の指導法、及び、「TS」におけるGCの導入方法を開発できたかどうかにより評価。
- ④ 国際性とコミュニケーション・ツールとしての英語力を向上させる取組
 - ・国際文化科の海外研修終了後、生徒への意識調査を実施し、評価する。
- ⑤ 「探究」に係る実践を中心とした英語版報告を作成し、学校ホームページにアップロードする。
 - ・「探究」に係る実践を中心とした英語版報告が作成され、学校ホームページにアップロードされたかどうかにより評価する。

3) 第三年次(2017年度)

A. 研究開発計画

- ① 大学等との連携計画についての相談と調整、及び、研究発表の実施
 - a. 課題研究に係る研究会・会議について調べ、生徒の発表・提案を行う。
 - b. 全国のSGH校によるSGH生徒研究発表会へ参加し、口頭発表を行う。
 - c. 本校の3年間の取組の実践報告会を実施する。
- ② 「GS」、及び、「TS」の指導法の研究開発
 - ・「GS」、及び、「TS」の指導法を研究開発する。
- ③ 海外大学へのダイレクト進学促進
- ④ 「探究」「探究基礎」の優れた作品の英語版を作成し、学校ホームページにアップロードする。

B. 評価計画

- ① 大学等との連携計画についての相談と調整、及び、研究発表の実施
 - a. 研究発表の質について、大学等関係者等より感想・意見をいただき、評価する。

b. 研究発表に係る表彰等により評価する。

② 大学等との連携計画についての相談と調整

・大学等との連携計画について策定できたかどうかにより評価する。

③ 海外大学へのダイレクト進学促進。

・海外大学へのダイレクト進学者数により評価する。

④ 「探究」「探究基礎」の優れた作品の英語版を作成し、学校ホームページにアップロードする。

・課題研究優秀作の英語版の作成と学校ホームページへのアップロードにより評価する。

4) 第四年次

卒業生に対してアンケート等を実施し、高校卒業後の意識の変容や大学卒業時の進路選択意識等の追跡調査を行う。その他は、第三年次と同じ。

5) 第五年次

府内高校・全国SGH校対象に5年間の取組の実践報告会を開催。その他は第四年次と同じ。

6) 研究開発成果の普及に関する取組

a 研究授業の公開・研究成果報告会の実施・学校ホームページへの課題研究の情報提供

・大阪府内の高校およびSGH校を対象に公開授業と研究成果報告会を実施する。

b 夏季休業中に、近隣の中学生を対象として英語力アップ講座を実施する。

c 他のSGH校との交流、SGH生徒研究発表会、大阪府内SGH校合同研究発表会へ参加

d 学会・各種研究発表会等での研究成果の報告

・研究過程や研究成果について、本校ホームページでの情報提供を随時行う。

(7) 研究開発成果の普及に関する取組

全国のSGH校によるSGH生徒研究発表会へ参加し、口頭発表を行う。また、府内の高校及び全国SGH校を対象に、本校の取組の実践報告会を開催し、本校が開発研究した「探究力を育成する指導法・教材集」「コミュニケーション・ツールとしての英語力を高める指導法・教材集」を作成し配布する。また、研修旅行等の成果を検証し報告書を作成し、配布する。それらについて、本校ホームページにおいて情報提供する。

(8) 幹事校としての取組

該当なし

(9) 研究開発組織の概要（経理等の事務処理体制も含む）

1) SGH運営指導委員会

SGH研究開発事業の運営に関し、専門的見地から指導、助言に当たる。学校教育に専門的知識を有する者、学識経験者、関係行政機関の職員等、第三者によって組織する。

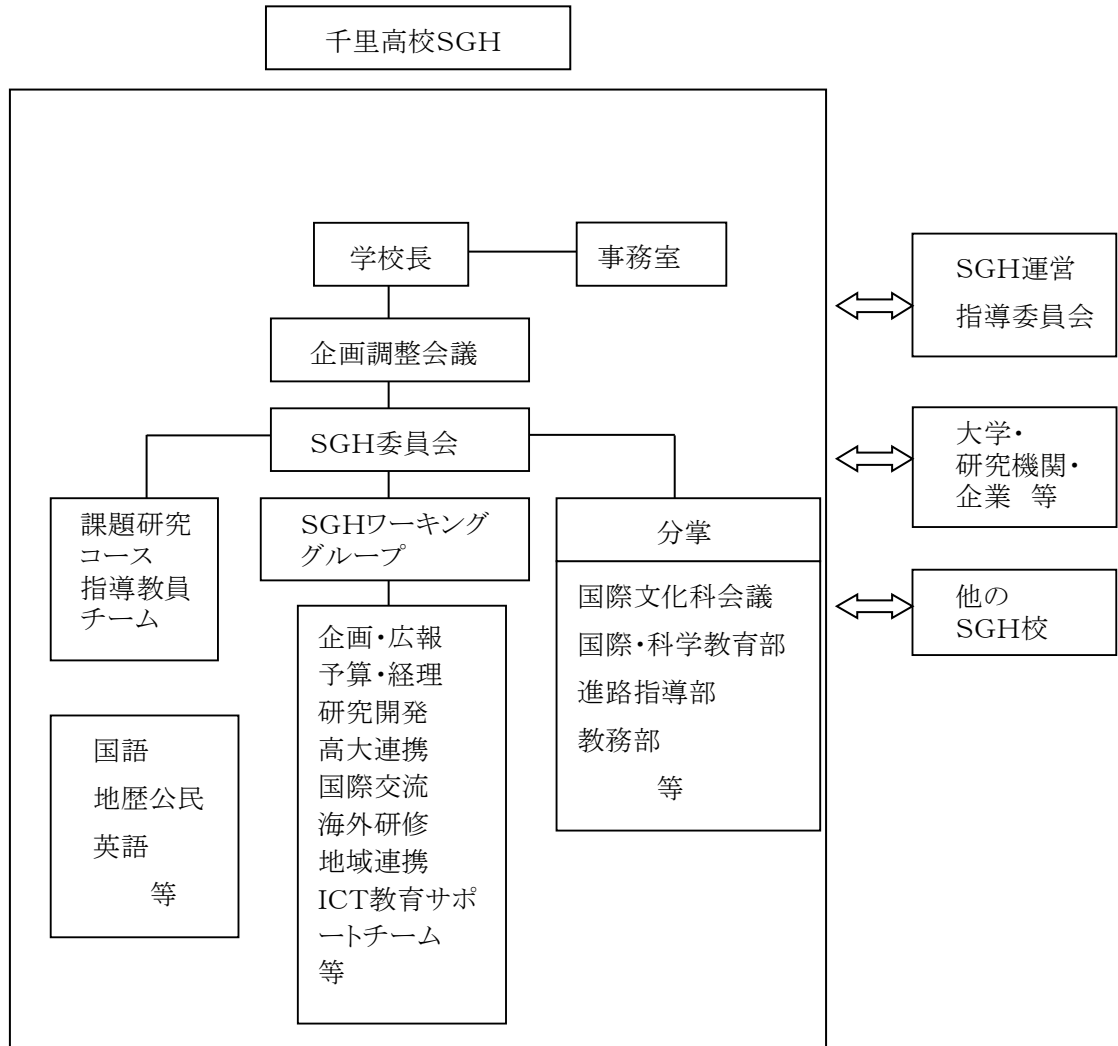
2) SGH委員会

SGH研究開発事業全般について、企画、運営、実施、研究開発、予算編成等を担当する。ワーキンググループを設け、各業務に当たる。

3) 課題研究コース指導教員チーム

GC課題研究コース、及び、その他の課題研究を指導する教員により構成する。指導法・評価検証方法を検討・作成・共有し、課題研究の推進役を担う。

組織図



Ⅱ. 実践報告

(1) 1年生対象のSGHプロジェクト 年間指導経過

1年生向けには、10月の課題研究「探究基礎」開講までの事前準備として、学校設定科目「国際理解」の特別授業、グローバル課題に取り組む若手研究者を招いての講演会、夏休みを利用したフィールドワーク研修、秋休みを利用した企業・大学訪問研修を行った。

そして、これらを受けた「探究基礎」の授業において、正確に文章を読み取ること、根拠を明らかにして意見を述べること、多角的に検討を加えること、賛成反対の両論を止揚する解決策を考え出すことを、グループワークを多く取り入れてトレーニングした。

それぞれの詳細については次ページ以降に記載。

6月	<ul style="list-style-type: none"> ○「国際理解」特別授業:「高校生の日常と国際的な課題のつながり(1)」 パームオイルと熱帯雨林の伐採、カカオと児童労働について 講師:松岡秀紀氏(一般財団法人アジア・太平洋人権情報センター特任研究員)
7月	<ul style="list-style-type: none"> ○ SGH 講演会:「国連職員になりたい私が、高校生の時に知っておきたかった4つのこと」 講師:板倉美聡氏(大阪大学法学部国際公共政策学科卒業・Durham University 修士課程)
8月	<ul style="list-style-type: none"> ○ 夏期フィールドワーク研修「国際×地元:Global×Local フィールドワークに行こう！」 とよなか国際交流協会にて「国際協力・国際交流と地域社会」「外国にルーツを持つということについて」の研修／茨木市豊川のモスクとコリア国際学園の見学とお話／英語で「国際人権」を学ぶ／ふりかえりワークショップ「グローバルな問題を解決するために必要な資質とは？」 ○ グローバルカレッジイングリッシュキャンプ 海外大学生がリードし、社会課題にチームで取り組み、発表するワークショップ型研修
9月	<ul style="list-style-type: none"> ○「国際理解」特別授業:「高校生の日常と国際的な課題のつながり(2)」 大阪での公害問題と住民運動の歴史を学習し、ロールプレイで多様な立場を実感する 講師:栗本知子氏(公益財団法人公害地域再生センター 研究員)
10月	<ul style="list-style-type: none"> ○ 秋休み企業・大学訪問「『現場』を知ろう。最前線で働く人の話を聞こう。」 人権・環境・労働に取り組む企業と関西学院大学を訪問して現場の話を聞く ○ 課題研究「探究基礎」開講 ○ 2年生の研究から課題研究を知る 2年生が書いた課題研究の要旨を読んでタブレットでレポートを提出
11月	
12月	
1月	
2月	<ul style="list-style-type: none"> ○学習成果発表会「千里フェスタ」 <ol style="list-style-type: none"> 1. 基調講演 2. ドキュメンタリー映画で学ぶグローバル課題 3. 代表グループがディベートを公開 4. 「探究基礎」全講座が「第3のアイデア」をポスター発表 5. 2年生の課題研究の発表に参加

課題研究「探究基礎」

(2) 1年生課題研究「探究基礎」

■対象・形態

国際文化科 160名対象。後期開講の週に1回2コマ連続の授業。1クラスを20人ずつに分けて少人数授業。

■ねらい

グローバル課題を対象に、問題解決のための基礎力を養う。基礎力とは以下の通りである。

「人権」「環境」「労働」の領域において、①文章・グラフを読解する、②要約する、③課題設定・仮説と検証・解決への道筋を理解する、④討論を通して意見を統合する、⑤プレゼンテーションとレポートの形式を知る

■評価の観点

①チームでの取り組みにおいて、進行や発言役などの役割を積極的に果たし、チーム活動に貢献したか、②適切な課題設定ができたか、③仮説の根拠には説得力があったか、④納得できるプレゼンテーション・レポート作成ができたか

■指導の概要

「国連グローバルコンパクト」に掲げられている10の課題をもとに、グローバル課題の発見から解決までの道筋を学習する。本校作成の教材プリント「探究基礎通信」を毎時間配布し、個人とグループでの取り組みを交互に繰り返し学習する。

■指導の流れ

第1段階として、国連グローバルコンパクトについて知り、課題はどのように設定するのかを学ぶ。

第2段階として、文章や表、グラフの的確な読み取り方を学ぶ。

第3段階として、ディベートを通じて、課題を多面的にとらえ根拠に基づいた主張を行う方法を学ぶ。

第4段階として、グローバルな課題に対しチームで課題を設定し、解決のための仮説とその検証およびプレゼンテーションを行うことで2年次における探究の取り組みに向けて基礎固めを行う。

■各回の指導内容

第1・2回 課題発見

「国際理解」授業での学習や生徒個人の情報収集から、人権・環境・労働に関する課題を収集し、研究対象を絞り込む。

第3・4回 研究の取り組み方

調べ学習にとどまることのないよう、研究は疑問文から始まること、安易な解決策にとどまらないようにすることを知り、課題文を作成する。

第5・6回 文章読解

資料を正しく読み取るために労働者の人権に関する文章、男女共同参画に関するグラフ・表に関する読解・記述問題に取り組む

第7・8回 ディベートは何か

ディベートとはどのようなものかを知り、1講座を3つのチームに分け、三つの論題で取り組むための準備を始める

第9・10回 ディベート対戦への準備

各論題に関する、現状とメリット・デメリットを中心とした情報収集を行う。情報収集をもとに立論の根拠を整理する。対戦をスムーズに行うために対戦チームどうしで立論の根拠を伝え合う。

第11・12回 ディベート 原稿作り

立論・反論の原稿を作成する

第 13・14 回 ディベート対戦

対戦チーム以外は審査だけでなく、「第 3 のアイデア」(後述)構築のためのメモをとる。

第 15・16 回 「第 3 のアイデア」構築

ディベート対戦を受けて、肯定否定の極論に偏らない、両者のメリットを止揚した形の解決案をチームで考える。

第 17・18 回 「第 3 のアイデア」ポスター作りとプレゼンテーション

「第 3 のアイデア」を模造紙にわかりやすく表現し、プレゼンテーションする

第 19・20 回 チームでグローバル課題に取り組む

第1回から第4回までの内容をさらに深く学習する。チームに別れ、取り上げるべきグローバル課題について話し合い、マグネットシートに「課題」「課題として取り上げる意義・理由」「必要な情報」を記入する。

マグネットシートを黒板に貼り付けプレゼンテーション。相互評価。

第 21・22 回 解決案の構築(1)

前回の課題に対する解決のためのアイデアをチームで考える。マグネットシートを黒板に貼り付けプレゼンテーション。相互評価。

第 23・24 回 解決案の構築(2)

前回のアイデアがなぜ有効といえるのか、根拠をチームで考え文章化する。根拠をまとめ、発表する。アイデアとその根拠をチームでマグネットシートに文章化し、プレゼンテーション。

千里フェスタ 学習の振り返り

ディベート優秀チームによるディベート対戦 2 年生探究発表・セッションに参加 「第 3 のアイデア」揭示発表

■ 成果

- ・「国連グローバルコンパクト」をもとに、グローバル社会での様々な問題の存在を学ぶことができた。
- ・課題を疑問文で表現し、根拠を伴った仮説を設定、仮説を検証し解決案を導き出すという論証の方法を学ぶことができた。
- ・問題の存在と論証の方法を知り、そのうえで、個人での情報収集・考察をチームで精選していく過程を学ぶことができた。
- ・明確な根拠をもった説得力のあるプレゼンテーションの方法を学ぶことができた。
- ・以上の成果から、「調べ学習」ではなく「課題解決学習」の進め方を学ぶことができた。
- ・第 19 回以降の、課題を解決する学習ではブレインストーミングとして課題の発見・仮説の整理・解決案討議のために「思考マップ」を利用し、チーム活動を円滑に進めることができた。

■ 課題

- ・根拠のある情報であるか否かを見極めさせること
- ・情報源としてインターネットばかりではなく書籍をさらに利用させること
- ・グローバルな問題を身近な問題に置換させて考えさせること
- ・生徒の成長を的確に捉える評価指標を作ること

■ 教材ワークシート

使用しているワークシートは全て本校の SGH ウェブサイトに掲載している。

(http://www.osaka-c.ed.jp/senri/sgh/images/kisotext_2016.pdf)

サンプルとして最初のページの一部を以下に掲載する。

探究基礎通信 ■ 1 何を学ぶのか ～ 国連グローバルコンパクト

国際文化科では1年生後期に「探究基礎」そして2年生では「探究」の授業があります。この授業の特色を二つの視点から紹介します。

1 何に取り組むか

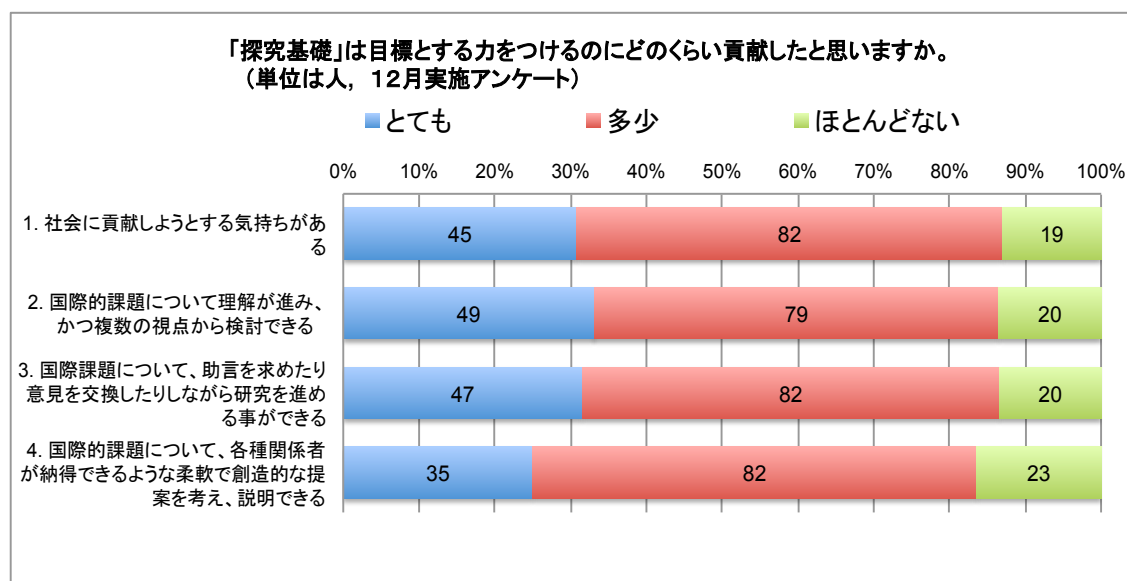
本校は今年度、文部科学省からスーパーグローバルハイスクール(SGH)の指定を受けました。大阪府の公立高校では他に5校が指定を受けています。以下は文部科学省のSGHに関するWEBサイトからの引用です。(www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/sgh/)

1. 目的：急速にグローバル化が加速する現状を踏まえ、社会課題に対する関心と深い教養に加え、コミュニケーション能力、問題解決力等の国際的素養を身に付け、将来、国際的に活躍できるグローバル・リーダーを高等学校段階から育成する。
2. 事業概要：国際化を進める国内の大学のほか、企業、国際機関等と連携して、グローバルな社会課題を発見・解決し、様々な国際舞台で活躍できる人材の育成に取り組む高等学校等を「スーパーグローバルハイスクール(SGH)」に指定し、質の高いカリキュラムの開発・実践やその体制整備を進める。

Q1 「グローバル化」とは何でしょう。調べましょう。

「国家」対「国家」という概念ではないところに「インターナショナル」との違いがあります。グローバルな課題の一例として日本でも大量に消費されている「パーム油」や「カカオ」の問題がありました。

■ 目標への寄与度



(3) 1年生対象 「国際理解」特別授業(1)

「高校生の日常と国際的な課題のつながり～パーム油とチョコレート」



■ 講師 松岡秀紀氏（一般財団法人アジア・太平洋人権情報センター特任研究員）

■ 実施日 6月15日、16日

■ 形態 国際文化科1年生全員（160名）対象に、「国際理解」の授業で、クラス単位で各1時間

■ ねらい 日本の高校生の日常生活が国際的な課題とつながっていることを知る。

このような課題の解決のために NGO・企業・国際的な枠組みによる取組があることを知る。

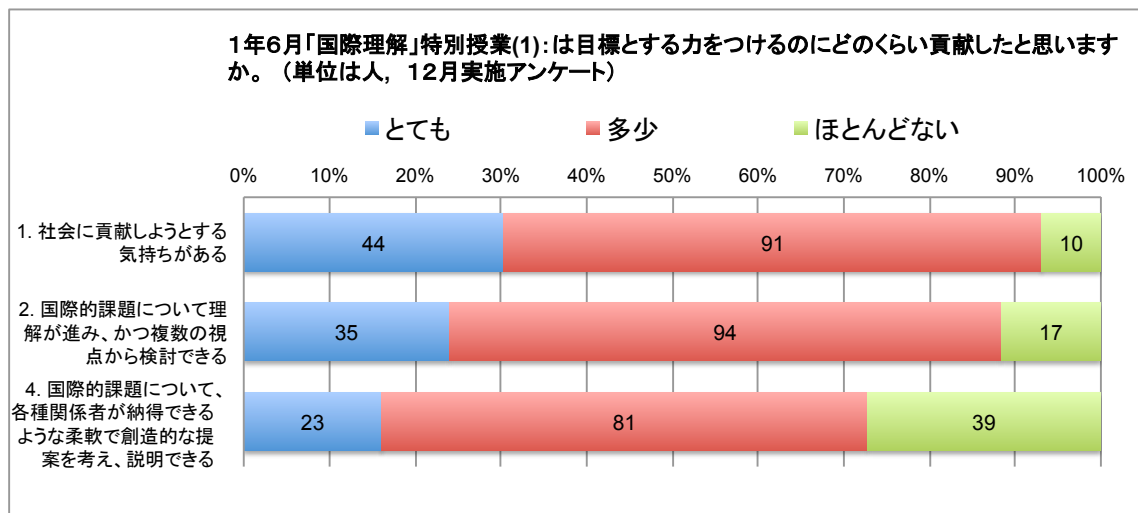
■ 生徒の感想

- ・ 私たちが普段食べているチョコレートの原料のカカオ豆の生産現場では15歳未満の子どもが学校にも行けずに働かされていると知って驚きました。
- ・ 正当な労働には正当な賃金が与えられるべきだと思います。チョコレートなどを買うときは、できるだけフェアトレードのものを買おうと思います。
- ・ 世界には紛争、貧困、環境問題などたくさんの現実があり、しっかり向き合えないといけないと思った。
- ・ 普段、生活していて世界とつながっていることは実感できない。だが今回、話を聞いて考えが変わった。小さなことが世界につながっていることを信じて行動しようと思った。
- ・ フェアトレードを実践している企業の製品をできるだけ購入し、また、そういう取り組みをする団体を増やすことが、世界の様々な格差を是正するための第一歩になると信じ、行動していきたいと思います。

■ 取組を終えて

- ・ チョコレート菓子やカップ麺など生徒の身近にある製品と、フェアトレードや環境問題などの国際的な課題とが深く関わっていることを、具体的な事例を挙げて紹介していただいた。また、「1チョコ for 1スマイル」の取り組みなど、企業と NGO が連携して国際的な問題に取り組んでいることを紹介していただいた。
- ・ 市民セクター、企業セクター、政府セクターという社会構造の視点を提示していただき、生徒の将来に向けた活動の方向性についても示唆を与えていただいた。

■ 目標への寄与度



(4) 1年生対象 SGH 講演会

「国連職員になりたい私が、高校生の時に知っておきたかった4つのこと」



■ 講師 板倉美聡氏（大阪大学法学部国際公共政策学科卒業・Durham University 修士課程）

■ 実施日 7月7日

■ 形態 LHRを使い、4クラス(160人)一斉に1時間

■ ねらい 難民問題の実情を現場で支援活動をしてきた経験者から聞く。

グローバル課題への取組み方の一つとして国連職員をとらえる。

キャリアデザインのモデルとしてグローバル課題に果敢に取組む積極的な姿勢を学ぶ。

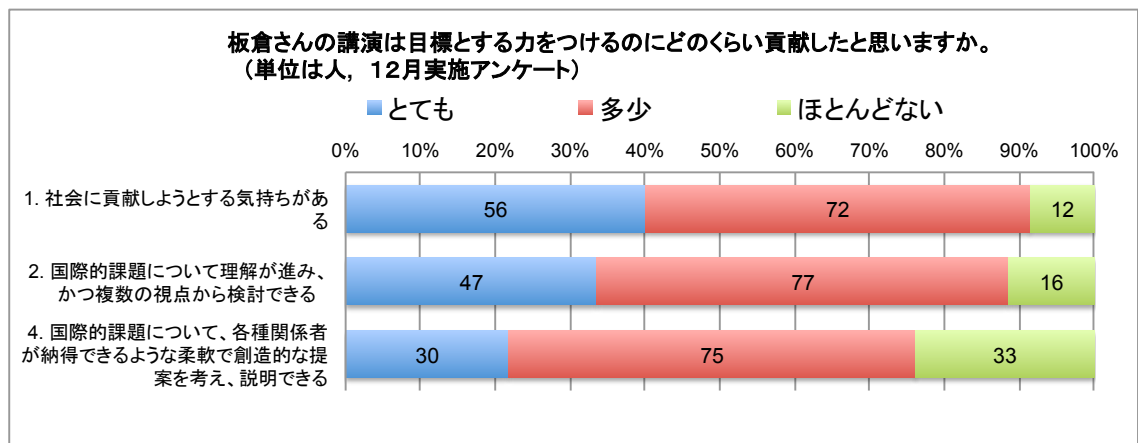
■ 生徒の感想

- ・「本当に叶えたいことは人に言いふらす」私はこれまで、叶わなかったら恥ずかしいから誰にも言わないでおこうと思っていましたが、この講演を聞いて、言いふらしたほうがいいことがたくさんあることを知りました。情報が集まったり、誰かが協力してくれたりして、夢が叶いやすくなるということを知り、とても納得しました。
- ・「常識を常識じゃないと思う瞬間を作れ」私はずっと当たり前のことを当たり前でできる人間になろうと思っていました。しかし、今回の話を聞いて、当たり前は自分にとっての当たり前でしかないのだと知り、考えが変わりました。相手がどう考えているのかを理解し、受け入れることが必要だと感じました。
- ・「マラミみたいな子はいっぱいいる。」現地の人たちからするとそれほど特別なわけではないという事を聞いた時にはとても驚きました。私たちが見たり聞いたりしているニュースはとても一面的であることを感じました。
- ・「世界で1番困っている人たちのために働く」僕の将来は海外で働いてみたいなあと思ってきたけど、この話を聞いて、もっと海外のことに興味がわきました。板倉さんはすごい行動力を持っているなととてもとききました。世界で1番困っている人たちのために働くなんて簡単に言えることじゃないのに言い切っていて、しかも実現させようとしているのはすごく勇気があってかっこいいなと思いました。

■ 取組を終えて

- ・ 難民キャンプの様子、難民の雇用問題、子どもたちの様子など現場経験者でしかわからないことを写真と経験談で伝えていただけた。
- ・ 目標を立て実現していく「コツ」を4つに絞って話していただき、生徒の気持ちを鼓舞していただけた。

■ 目標への寄与度



(5) 1年生対象 夏季フィールドワーク研修「Glocal Seminar」

■実施日 8月2日, 3日, 4日の3日間

■形態 国際文化科1年生の希望者対象(昨年参加できなかった2年生も1名参加)
原則として3日間参加する。

■ねらい

- ・ 国際的な課題が地元大阪にも形を変えて存在する。国際協力・宗教・「外国人」の教育について現場を訪れてお話を聞いて理解を深める。
- ・ 国際人権について英語で考える経験をする。
- ・ 研修全体を振り返り、グローバルリーダーにとって必要なことは何かを考える。

ー1日目ー

■会場 豊中国際交流センター

■参加者 1年生27名 2年生1名



① 全体プログラムの紹介、参加者の交流

■ファシリテーター 朴君愛氏(アジア・太平洋人権情報センター)

- ・名前、ニックネーム、特技、参加動機、学びたいこと を書いて班の中で自己紹介
- ・研修ルール:名前をつけて意見を口外することはしない、困っていることや要望は遠慮なく等

② 在日外国人の現状とよなか国際交流協会の活動紹介

■講師 山野上隆史氏(とよなか国際交流協会事務局長)

- 内容
- ・在日外国人の現状、とよなか国際交流協会の設立目的・重点事業について対話+館内調査+ワークショップ形式で紹介していただいた。
 - ・在日外国人の現状:日本にいる外国人と聞いて、どんな人を思い浮かべますか?ふだん外国人との交流や出会いはありますか?日本にはどれくらい外国人がいますか?どこの出身の人が多いと思いますか?
 - ・とよなか国際交流協会の活動:「どんな人が関わっているのか、どんなことをしているのか、なぜするのか」を館内の展示物を見て調査した後、班で発表。それを受けてまとめていただいた。

③ 「外国にルーツのある若者の声をきく」

■講師 上田亜希子氏(とよなか国際交流協会事業参加者)

- 内容
- ・母フィリピン人で父日本人の日本生まれ日本育ちのダブル。中学卒業後、高校・大学はフィリピンに留学したという経験から、中学時代のいじめ・留学した動機・留学時に感じた文化の違い・日本社会を相対的に見られるようになったこと(日本がどれほど生活に恵まれているか・フィリピンはどれほど異なる考え方に寛容か)などを紹介していただいた。最後に、「異文化の人々と触れ合ってその国や人々を自分の経験から理解してほしい」「自分はダブルであるからこそ親戚がいて経験ができた。人と違うことで活かせるメリットが有る」とのメッセージを話していただいた。

④ 翌日のフィールドワークに向けての事前学習

「部落問題解消に向けた取り組みの経緯—法令等をもとに—」

■ 講師 林伸一氏(大阪教育大学学術部附属学校科指導参事)

■ 内容 ・「独立戦争前のベトナムで暮らす優秀な高校生であると想像してください。当時最も豊かであった米国から、最も優秀な大学に入学し、その後の進路も保障するとの誘いがありました。皆さんはどのような選択をしますか。」との問いから出発し、生徒の意見を聞きながら、部落問題についての考え方を導入したあと、同和対策審議会答申(抄)を中心に、部落問題の概要について紹介していただいた。

⑤ 1日の振り返り

■ ファシリテーター 朴君愛氏(アジア・太平洋人権情報センター上席研究員)

— 2日目 —

■ 参加者 1年生 24名 2年生 1名



① イスラームの基礎知識と地域における活動を学ぶ

■ 会場 茨木市立豊川いのち愛ゆめセンター

■ 講師 山根絵美氏(大阪大学大学院人間科学研究科 博士後期課程)

■ 内容 ・世界のムスリムの人口は15億人、ムスリム人口が一番多いのはインドネシア、日本に住むムスリムは 11 万人で日本国籍を持つ人は1万人、日本にあるモスクは 80 で関西には4箇所、といった統計的な情報だけでなく、ジハードのうち大ジハードは自分に打ち勝つ心の中の戦い(クローズアップされているのは小ジハード)、イスラームの語源は平和、ラマダンは大切にたのしみにされている、習慣的な日常生活も含めてイスラームと呼ぶ、などイスラム教が何を大切にしているのか、そして地域の商店街と協力して被災者支援を行っていたムスリムがいたことなどを紹介していただいた。

② イマーム(モスクの指導者)によるイスラム教紹介とモスクの見学

■ 会場 大阪茨城モスク

■ 講師 大阪茨城モスクイマーム、通訳:ウズベキスタン出身大阪大学法学部留学生

■ 内容 ・お祈り、コーランの内容、お祈りの前の身体を清める手順、土曜日の午後から開かれる各種の勉強会などについて紹介していただいた。コーランの部分では、アラビア語でコーランの最初の節を唱えていただきました。また、別棟になった、お祈りの前に身体を清める設備のある建物も見学させていただきました。

③ 国境をまたいで活躍する「越境人」をめざすコリア国際学園の理念を学ぶ

■ 会場 コリア国際学園

■ 講師 1期生で学生会会長をし、大学進学後中国北京大学に留学し中国語を学んできた方と、同期で高校卒業後アメリカの大学に進学し映像制作を勉強している方のお二人

■ 内容 ダブルでありながら言葉も文化も知らなかったのがこの学園を選んだこと、コリア国際学園では日・米・コリアの3言語で勉強をすること、言語の授業は学年関係なく習熟度別に論文を書く・討論をするなどコミュニケーション中心であること、歴史は日本史、世界史、コリア史、日朝関係史を勉強すること、また、留学先での勉強の様子や将来の計画についてもお話をお聞きした。

④ 「1日の振り返り」

■会場 コリア国際学園

■ファシリテーター 朴君愛氏(アジア・太平洋人権情報センター上席研究員)

－ 3日目 －

■会場 本校図書室, CAL3 教室

■参加者 1年生 26名 2年生 1名



① 国際人権基準の考え方について英語で学ぶ

■講師 ジェファーソン・R・プランティリア氏(アジア・太平洋人権情報センター主席研究員)

■内容 世界人権宣言をベースにした、人権についての英語によるワークショップ

1. オリンピックに関する下記質問についてグループディスカッション

- ① Why are people so excited about the Olympic Games?
- ② What do athletes think about the Olympic Games?
- ③ What do you think are the goals of the Olympic Games?

2. 国連の概要説明(重要なキーワードを交えながら)

・Need support for better life ・Need support to enjoy freedom

3. 世界人権宣言について

・掲げる権利 ・新しい権利 ・人権のあり方

4. グループ毎に異なるテーマについてディスカッション

<あるグループのテーマ>

① In case you have joined groups or organizations in school, did you have a good or bad experience?

② Would you want to join groups or organizations in future? Why?

5. まとめ

② 研修のまとめと3日間の振り返り

■講師 朴君愛氏(アジア・太平洋人権情報センター上席研究員)

■内容 2日間の振り返りをグループワークで整理する。グローバルな問題を解決するために必要な資質(=力、視点、考え)とは何かについてグループで意見を整理し、発表する。

③ 研修レポートづくり

■指導 大西千尋(千里高校教員)

■内容 グループで分担して各研修のレポートを作成。何をしたか、自分たちはどう思ったかをスライドにまとめる。このスライドを使って「探究基礎」初回の授業時に各クラスで報告をする。

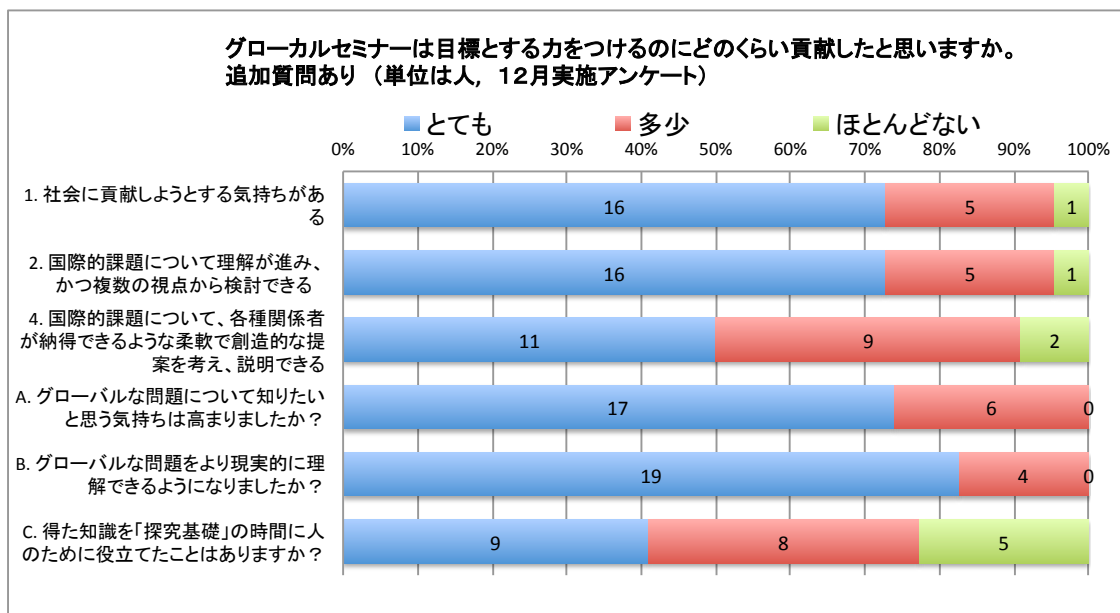
■生徒たちの感想

- ・ 山根さんの話からイスラム教の人たちは、神を信じ、断食をすることで、食事ができることに感謝しているということを知り、全くイメージと違いました。メディアを鵜呑みにするのではなく、自分自身で体験することの大切さを知りました。
- ・ フィリピンと日本のダブルの、上田さんの話から、外国に留学することは、その国のことについて学ぶだけではなく、自国である日本についてもさらに知ることが出来るということがわかりました。
- ・ コリア国際学園では挑戦することの大切さや、やる前からあきらめたらいけない、やってみたらできることが増えていくなどの大切なことを学びました。留学のことなど詳しく聞けて私もどんどん挑戦していこうと感じました。
- ・ 国際人権について英語でお話を聞くことによって世界人権宣言をよりグローバルに感じる事が出来ました。
- ・ この三日間で世界についての知識がすごく増えたとし、今まで以上に興味を持つことができました。
- ・ 最初はなぜこんなことをするのか疑問に思っていたけれど、この三日間を通して視野が以前より大きく広がったと思います。

■取組を終えて

- ・ 実際に現場に行って本人からお話を聞くインパクトは大きい。
- ・ テーマの一つにイスラム教を取り上げたのは良かった。偏見を持ちやすい現在の社会状況があり、その一方でイスラム教信者が日本でも増えている状況があるからだ。
- ・ 「振り返りの時間」で意見の交流をしたことを刺激的だと感じた生徒も多かった。

■目標への寄与度



(6) 1年生対象 「国際理解」特別授業(2)

「西淀川の公害問題解決の軌跡から多様な立場と合意形成について学ぶ」



■講師 栗本知子氏（公益財団法人公害地域再生センター 研究員）

■実施日 9月13日，14日

■形態 国際文化科1年生全員対象に，「国際理解」の授業で，クラス単位で各1時間

■ねらい

- ・ 環境問題を理解する導入として、地元の大阪での公害問題と現在までの経緯を学習する。
- ・ 問題の解決には多様な立場の調整が必要なことを大阪の事例を用いたロールプレイを通じて理解する。

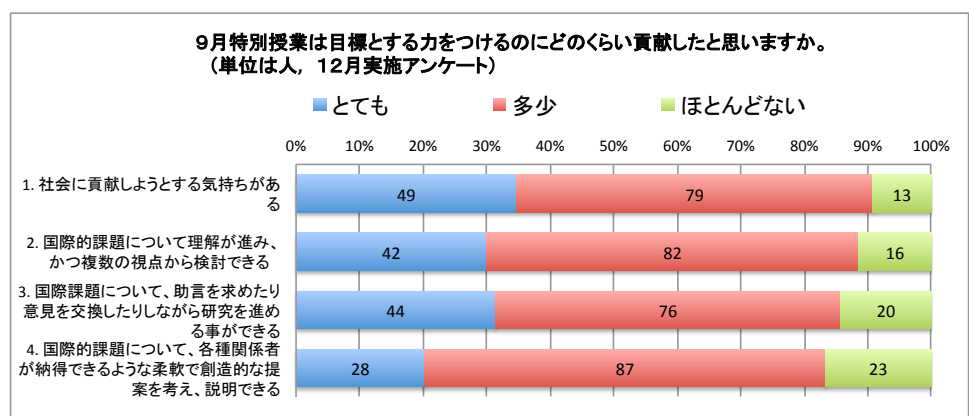
■生徒たちの感想

- ・ 簡単に工場を止めてほしいとひとことで言っても、お金の問題や原因が工場でなかったときの責任問題などたくさん問題があり、合意形成をするのが難しいと感じた。
- ・ 自分の意見を持ちながら相手の意見を聞き入れようとするのはむずかしいと思った。
- ・ 公害の起こった町の人がいかに努力してもとの状態に戻したかということがわかった。
- ・ 日本の産業の発展の裏には公害問題というのがあって、たくさんの方がその公害により、大変な思いをしたということが分かりました。周りの人や環境にも目を向ける必要があると思いました。
- ・ 一番印象に残ったのは今の中国のように昔の日本の空気はとても汚れていて、昼間でも車のライトをつけていたということです。今の日本では中国の汚染された空気を嫌い迷惑というように報道しています。日本も昔はそれに近いものだったなら、改善の方法、方針を中国も納得のいく形で示せたらいいのと思います。

■取組を終えて

- ・ 事前に西淀川の公害問題についてのビデオをみたり、被害者のエピソードなどを学習していたことで、特別授業のロールプレイにスムーズに入れたようである。
- ・ 今回のロールプレイを通じ、多様な立場から物事を捉えることの重要性やその難しさを生徒たちは感じ取ることができたようである。
- ・ 感想のなかには「西淀川公害の解決に至った経緯を知りたい」といったものや中国の環境問題について考察したものもあり、社会問題への探究心の芽生えが感じられる。

■目標への寄与度



(7) 1、2年生対象 秋休み企業・大学訪問研修



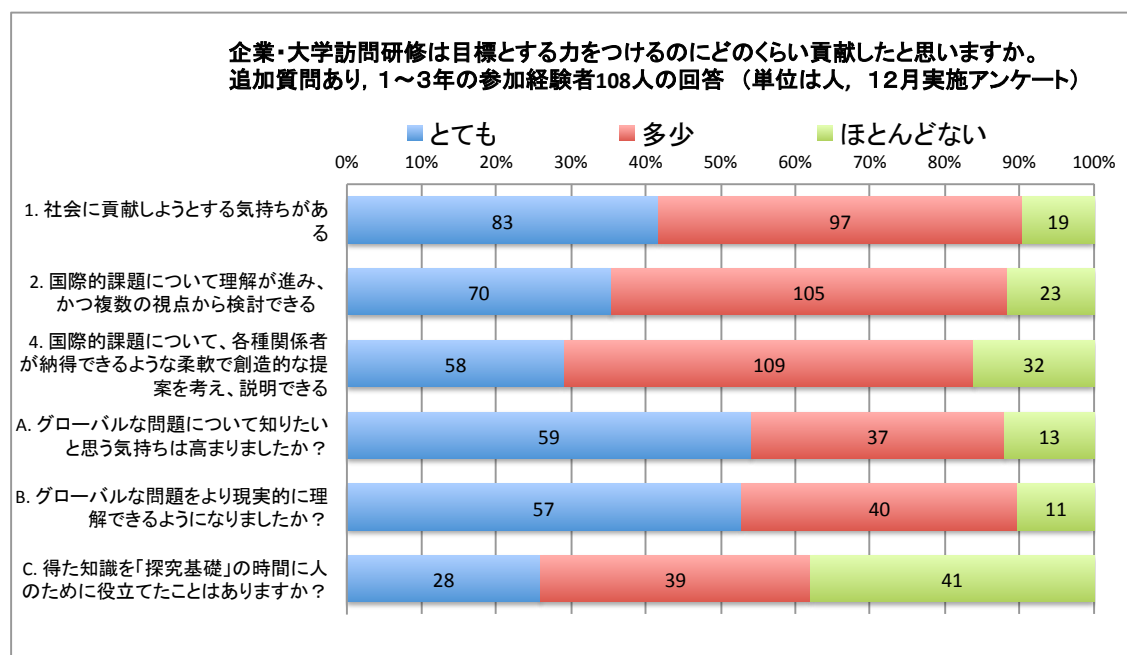
- **実施日** 10月6日、7日（本校の「秋休み」の平日2日間）
- **形態** 1,2年生の希望者が、グローバル課題に取り組む企業と大学を訪問し、学習・インタビューする。午前または午後の2～3時間。各グループに教員1名が最寄駅から引率した。
- **ねらい**
 - ・生徒たちが講演や文献で学んだグローバルな課題について、企業がCSR（企業の社会的責任）としてどう取り組んでいるのかを、直接担当者から紹介してもらい、質問する。
 - ・現場の実際を垣間見ることで、探究で取り組む研究を地に足の着いたものにする
 - ・仕事の一つの実例として自分の将来を考える材料にする。
- **実施の詳細** 訪問先は次の9企業、1大学。（ ）内はテーマ。
 - ・ 大阪ガス（女性社員のキャリア形成サポートの取組・柔軟で効率的な働き方を可能にする制度）
 - ・ ダイフク（『女性活躍推進法』への対応を中心に人事面での社の方針や取組内容）
 - ・ 中西金属工業（女性活躍推進プロジェクト・企業内保育所）
 - ・ 日本写真印刷（グローバルな労働・環境基準に適合したものづくり「サプライチェーンとの対話」）
 - ・ 日本電産（紛争鉱物開示ルール対応・仕事と家庭の両立支援とダイバーシティ推進活動）
 - ・ ノーリツ（グループとしての環境に関する組織的な取組）
 - ・ マンダム（海外展開を含めた事業・沿革とCSR(企業の社会的責任)の関係)
 - ・ 江坂-起業家支援センター（「起業」という働き方）
 - ・ トラベル・フロンティア（東南アジア貧困層へのボランティア体験ツアー）
 - ・ 関西学院大学（国際協力において大切なこと・「国連ユースボランティア」の経験から）
- **生徒たちの感想**
 - ・ わたしは女性の社会進出について興味を持っていました。そして、今日訪問した大阪ガスでは実際に行っている取り組みについてたくさん学ぶことができました。その取り組みとは、復帰支援が豊富で女性が抱える問題を極力減らしてきているという印象でした。わたしは探究の授業で調べたのですが、知らなかった制度もあって勉強になりました。
 - ・ ダイフクの顧客とその売上げの7割は海外で、22ヶ国まで事業を広げており、僕の夢は海外の店舗や海外に関わる職につきたいと思っているので、働きたい職業の幅がさらに広がった感じがありました。まだまだ、どんな職業が自分に合っているのか、探したくなりました。
 - ・ 中西金属工業は本当に女性の活躍に力を入れているんだなあと思いました。例えば、この企業には企業内に保育園があり出産した女性でも会社で働き続けることができます。また、女性で育児休業を取っている人が9割を越え、男性社員の育児休業も促進しているということなので、まさに育児との両立が可能だとわかりました。私は、日本は北欧に比べて育児と仕事の両立が難しいと聞いたことがあったので少し驚きました。日本に、このような女性が働きやすく、男性が育児をしやすい環境が整った企業がもっと増えて欲しいと思いました。

- ・ 今回の企業訪問で学んだこととして nissha についてでもありますが、最も大きかったのはサプライチェーンとそれに対する企業の努力です。具体例を紹介して下さり、その問題点についてもみんなまで意見を出しあい議論しました。その結論でまとまったのが、どんなに小さな企業でも、声を上げれば何かしらの形で必ず社会に伝わり変えるきっかけになるということです。
- ・ 環境や社会との調和や人権の尊重、女性の仕事と家庭の両立など様々なことを配慮しながら製品作りをしている。環境との調和の面では、品質の良い製品を作って排出する二酸化炭素量を削減することなどだ。人権の尊重の面ではコンゴ民主共和国とその周辺の 9 か国で武装勢力が強制的に金、スズ、タンタル、タングステンの 4 鉱物をとらせ、儲けを出し、戦争の資金源としていることを問題視し、武装勢力が人権を無視してとった鉱物を使用しない様にするため膨大な数の項目を調査している。女性の仕事と家庭の両立の面では、様々な支援策をとっている。実際に日本電産では、出産・結婚で仕事を辞める人がほとんどいないようだ。また、日本電産での女性管理職は年々増加しているというデータがあった。さらに日本電産は、部品メーカーの中では女性管理職の割合が非常に高いことがわかった。
- ・ 旅行代理店の社長がフィリピンでボランティアをされた経験を話してくださった。(中略)また、ボランティアとは、実は、ボランティアをしている側の方が現地の人達の元気や、笑顔などを通じて助けられるという、ボランティアをする側もされる側も幸せになれる活動であると改めて感じた。ボランティア活動を通じて、世界の様々な現実を知っていくことしてみたいと思った。

■ 取組を終えて

- ・ 現在企業が CSR 部門に力を入れることは、企業倫理としてだけでなく、投資先として選ばれるための、また、消費者から支持され選ばれるための要素ともなっている。これからの社会人は、これらのダイナミクスを理解した上で行動することが求められる。
- ・ 具体的な話を担当者ご本人から聞くことで、生徒は問題についての現実的なイメージを鮮明に持つことができる。今後も協力をお願いし、継続していきたい。

■ 目標への寄与度



(8) 2年生対象のSGHプロジェクト 年間指導経過

従来の課題研究に対して、開講講座のテーマに〈人権・労働・環境〉を加えたほか、研究を課題解決型とするように指導した。

また、研究支援の試みとして、テーマに関連した取組をしている企業を訪問したり、中間発表として研究途上の時期に優れた研究を全員で聞いたり、その発表に対する大学の研究者や企業のCSR担当者のコメントを聞いたり、あるいは大学院生から研究の進め方について個別に指導を受けたりする機会を設けた。さらに、できる限り研究に必要な図書と論文を入手できるようにした。



(9) 2年生課題研究「探究」

■対象・形態

国際文化科 160 名対象。1 週間に 1 回、2 コマ連続。1 週間に 1 回、2 コマ連続。国際文化科 4 クラスのうち 2 クラスずつを 6 展開した少人数授業。

■位置づけ

本校 SGH の取組の中心となる科目。1 年時に専門科目「国際理解」・SGH 特別授業・SGH 講演会・グローバルセミナー・企業/大学訪問研修・「探究基礎」で学んだことを元に、各自がテーマを決めて課題研究を行う。

■講座のテーマ

SGH の研究開発構想を立ててからは、国連グローバル・コンパクトの課題領域である「人権・労働・環境」と関連領域(今年の場合は「教育・子育て」)をテーマにしている。4月に各講座のテーマを紹介した後、希望調査を行い、所属講座を決める。また、研究の目標を、課題解決のための提案をすることとすることによって、調べ学習に終わらせず立論を求め、将来の行動につなげるようにしている。

■指導の流れ

- ①講座決定までは、「社会と情報」分野の授業を集中的に行い、生徒は、論文作成と発表に必要な文書作成およびプレゼンテーションソフトの操作を学習する。また、週替りで論文の構成や先行研究の調べ方について学習する(4月)。
- ②講座決定直後は、各講座に分かれて講座のテーマに関する基礎知識をグループで分担して調べて発表したり、ディスカッションをしたりして理解を深める(5、6月)。
- ③関心のあるテーマについて Web 上の記事や入門書を読んで、研究テーマを探す(6月)。
- ④夏休みの間に読むことができるように、参考文献を決める。学校にないものは、購入のリクエストを受け付ける。(6、7月)
- ⑤夏休み明けに「今までにわかったこと」を 1000 字にまとめて発表し、他の生徒からコメントをもらう。意欲のある生徒は、大阪大学国際公共政策学科主催の合宿研修に参加する。(8月)
- ⑥コメントを受けて追加調査を行ったり、再構成したりして 2000 字のレポートとスライドにまとめ、講座内で発表する。事前に示してある観点に基づいて生徒と指導教員が評価する。(9月)
- ⑦講座代表の発表と専門家によるコメントを、学年の国際文化科全員が聞き、各自の研究を振り返る。また、2000 字レポートに対して、大学院生から個別にアドバイスを受ける。(10月)
- ⑧助言を元に、参考文献の複数化、現地調査の実施を行い研究の内容を豊かにさせる。(11、12月)
- ⑩研究の現状をスライドにまとめて講座内発表を行い、意見交換を行う。(12月)
- ⑪3000 字レポートを冬休み明けに提出し、再度大学院生から個別にアドバイスを受ける。また、スライドを作成し、講座内で発表し評価する。(1月)
- ⑫学習成果発表会「千里フェスタ」で、全研究を口頭発表する。
- ⑬4000 字にまとめ、最終論文として提出する。1 年の成長を振り返り、今後の課題を文章化する。
- ⑭意欲のある生徒は、「全国スーパーグローバルハイスクール課題研究発表会-SGH 甲子園」(3月)や「大阪大学国際公共政策コンファレンス」(4月)に応募・発表する。

■ 評価の観点

① 次の項目をあらかじめ示し、生徒間評価、教員により評価に利用した。はじめは項目を絞り、研究の進行に合わせて、少しずつ広げていった。

タイトル	的確・効果的	研究内容がわかり、興味を惹くタイトルがつけられている。
目的と課題	目的の重要性	研究目的に意義があるか (この講座の目的に照らして)
	今後の発展性	より大きな目的との関係を明らかにして今後の課題を具体的に述べている。
方法	的確さ	目的にふさわしい方法で調査をしている。
	再現可能	第三者が同じ調査をすることができるくらい方法が明示されている。
参考文献	根拠	信頼できる複数の資料に基づいている(ことがわかる)か
	記述	ルールに従って参考文献を記述している。
結果 分析 結論	整理	結果を整理してわかりやすく述べている。
	論理	話が論理的か (目的→調査→分析→結論 の論理の流れ)
書式	書式	指定された文字数・書式で書かれているか
発表の様子	話し方	発表の音声は明瞭であるか(声の大きさ・スピード・抑揚)
	スライド	スライドは読みやすく 必要十分な内容が書かれているか
	積極性	発表者の伝えようとする熱意が感じられるか (聴衆に視線を送り、表情を見せているか)

② また、最終授業では、一年を振り返り、今後につなげるため、次の自己評価シートへの記入を求めた。時間のある講座では、記入後講座内で発表した。

「探究」のまとめ

【1. 今年の探究活動を自己評価しよう。】

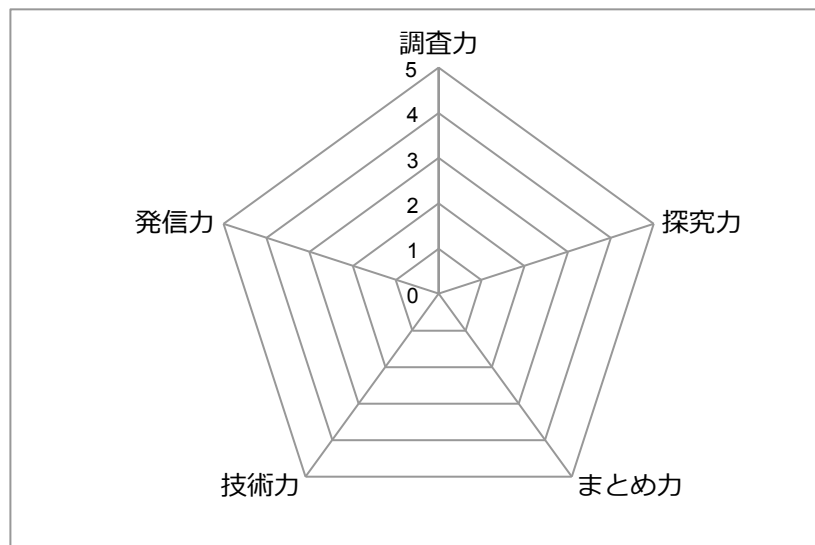
5段階でどのくらいできたか、チャートを作ってみよう。

調査力	<ul style="list-style-type: none"> ネットで元データ(調査主体が掲載した情報)を利用したか 参考図書をどのくらい読んだか(3冊以上○) 論文(先行研究)を読んだか(1論文以上○) 現場取材・関係者への取材をしたか(◎) 調べたことをノート(電子可)にまとめて活用できたか
探究力	<ul style="list-style-type: none"> 疑問を立ててそれに答える形で探究できたか 自分の研究の課題を絞り込んで取り組めたか 課題にふさわしい方法で調査できたか 他国との比較や実例を用いて考察できたか 他人(他の生徒・TA・担当教員)の意見を研究に活用できたか
まとめ力	<ul style="list-style-type: none"> 魅力的なタイトルをつけられたか 章立てや段落を効果的に使ったか

	<p>調べたことと自分の考察を区別して書けたか</p> <p>自分の考えを支持する十分な理由、根拠を示すことができたか</p> <p>立てた疑問に対して答えているか</p> <p>研究の足りない部分を、今後の課題として整理して書けたか</p>
技術力	<p>パワーポイントを効果的に利用できたか</p> <p>ワードを使いこなせたか</p> <p>参考文献は正しく記述できたか</p> <p>形式を守って論文、プレゼンを提出できたか</p> <p>共有フォルダの正しいフォルダに提出することができたか</p>
発信力	<p>原稿に頼らず自分の言葉でプレゼンできたか</p> <p>声の大きさやアイコンタクトなどが適切であったか</p> <p>プレゼンで写真や図表を効果的に用いたか</p> <p>質問やコメントに的確に答えられたか</p> <p>自分の取り上げた課題は周りの人の問題意識を高めるのに役立つか</p>

この探究の授業をきっかけに、グローバルな課題に関心を持って、何が起きているのか、何が問題なのか、どうすれば解決できるのか、私たちにできることは何なのか、と考え、自分が動き、周りを動かす社会人になってほしいと思います。 一年間お疲れさまでした。

自己評価チャート



【2. 振り返っての感想】

どんな気づきがありましたか？どんな力が伸びましたか？今後どんな力を更に伸ばしたいですか？
指導教員に提案はありますか？

.....

.....

■工夫

- ①テーマに関する基礎知識を共有することから各自の研究を始めるようにしている。
- ②多角的に問題を見ることを促すため、1)他の生徒の発表を見る、2)他の生徒・大学院生・研究者・企業のCSR担当者からのコメントを聞く、3)複数の参考文献・先行研究の調査をする機会を設定している。
- ③1000字、2000字、3000字、4000字と、4段階でレポートの提出を求め、それぞれに明確に目標を示し、フィードバックを得られるようにすることで、段階的に研究を進められるようにしている。
- ④年齢が近く、程よく距離感のある大学院生から複数回「セカンドオピニオン」を得られるようにしている。不十分な所を指摘し補うためのヒントをもらえる他に、長所を評価してもらえる、成長を評価してもらえる機会となっている。(大学院生のリピーターも複数)
- ⑤大学院生・研究者・企業のCSR担当者との協働指導により、指導教員が、有益な指摘・情報を得られ指導を見直す機会となっている。(論文の構成、参考文献の示し方、話し言葉と書き言葉の区別、主観的・情緒的な言葉の客観的な表現への置き換え、現場の状況、国際比較、企業活動の実情など)

■改善点

昨年と比べると、1)基礎知識を生徒が調べて発表する形式にする、2)評価の観点を早い時期に示す、3)生徒間の意見交換が行える機会を作る、4)教材の共有・運営の役割分担が進む等の改善を行った。

その結果、12月実施のアンケートにおいて、「『探究』の時間は知的好奇心を高めている」への肯定的回答は昨年より10ポイント上昇し8割に達した(よくあてはまる34%、ややあてはまる46%、あまりあてはまらない15%、全くあてはまらない5%)。

■改善計画

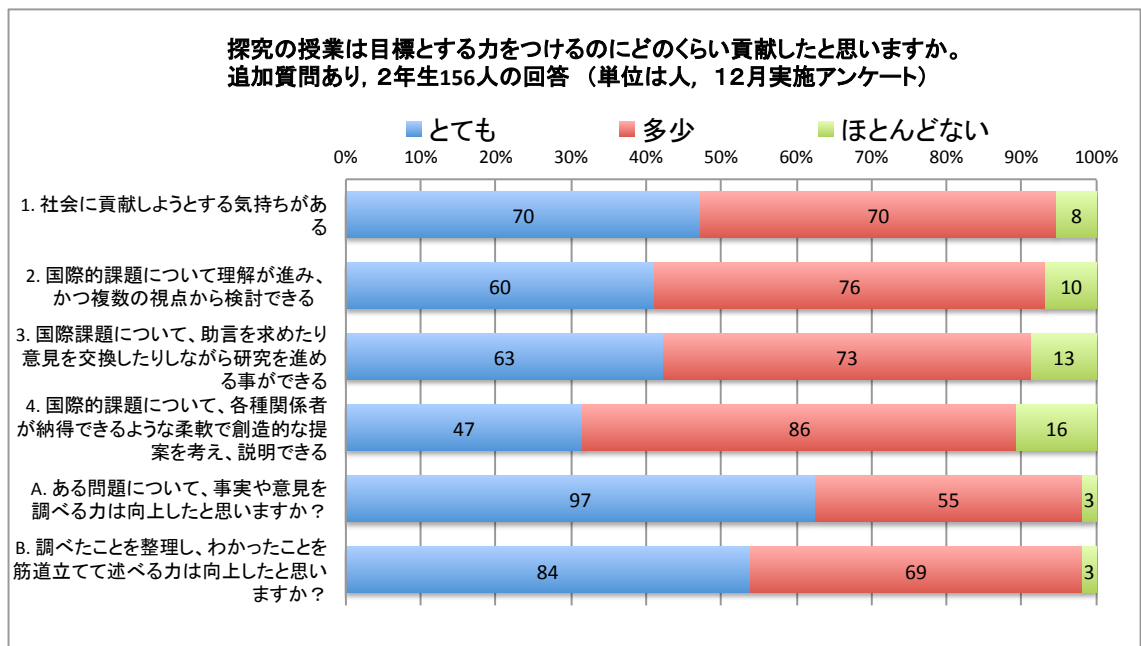
来年度は、1)論文の構成や先行研究の調査方法などの指導の早期の徹底、2)地元の現場への取材の奨励、3)企業との協力関係の強化の他、4)共同研究を基本にする(複眼、対話、推進力)、5)講座の壁を外した小発表会の開催、6)指導の流れと教材・ループリックの共通化、7)英文によるタイトル・要約・キーワードの記載を試みる。

■各回の指導内容の例

5月18・26	第1回	問題意識と基礎知識の共有 - ドキュメンタリー映画 The True Cost
6月02・09	第2回	映画を見て感じたことの交流+多角的な視点について知る+調べてみる①
16	第3回	基礎知識を調べて発表
23	第4回	調べ方を知ろう+ レポート(1)の作成① >レポート(1)は、900-1100字
7月20	第5回	レポート(1)の作成②+夏休みの計画
8月25	第6回	レポート(1) 提出+相互批評→レポート(2)の作成①
9月8	第7回	レポート(2) の完成② >レポート(2)は、1800-2200字
15	第8回	レポート(2) をパワーポイントにまとめる
29	第9回	講座内中間発表会→代表選出
10月19		【中間発表会】
20	第10回	レポート個別指導① 情報源を複数に、先行研究→図書・論文・取材
27	第11回	レポート(3)に向けて >レポート(3)は、3000-4000字

11月 1	第12回	レポート(3)に向けて	
10	第13回	発表スライド作成	
11月 17	第14回	講座内発表・意見交換会-前半	
24	第15回	講座内発表・意見交換会-後半	
11/25-11/30		【後期中間テスト】	
12/02-12/07		【研修旅行】	
12月 15	第16回	レポート(3)に向けて	
1/10		【レポート(3)提出〆切】	
1月 12	第17回	発表スライド作成	
19	第18回	レポート個別指導②	
26	第19回	講座内発表会③	
02月 02	第20回	千里フェスタ用にスライド修正・最終レポート作成	
02/09-02/13	千里フェスタ		>最終レポートは、4000-4400字
16	第21回	最終レポート確認・提出、振り返りシート記入	
02/17		最終レポート提出〆切	
03/19		全国スーパーグローバルハイスクール課題研究発表会	

■ 目標への寄与度



(10) 2年生対象 「探究」講座への大学院生訪問指導



- **実施日** 1回目：10月21日，24日，11月7日， 2回目：1月16日，19日（各2時間）
- **形態** 各講座を1,2名の大学院生が訪問し、論文の個別指導や発表に対する講評を行っていただいた。生徒の論文を事前に送ってアドバイスの準備をしていただいた。
- **ねらい** 普段指導している教員とは違った角度から指摘・評価を受ける。
論文作成に取り組んでいる先輩の立場からアドバイスを受ける。

■ 実施の詳細

- ・ 関西学院大学高大接続センターが窓口になり、本校の希望の把握、大学院生の募集、連絡事項の伝達、レポートの転送をしていただいた。
- ・ 10講座に対して、講座の研究件数に合わせて延べ28名を派遣していただいた。
- ・ 2回とも訪問していただける方を募集していただいたので、2回目は前回の様子がわかった上での指導をしていただけた。

■ 生徒たちの感想

- ・ 全体のバランスを見てもらえた。
- ・ 客観的に見てわかりにくい点、そして良い点を指摘してもらえた。
- ・ 論点のずれを指摘し、アドバイスをもらえた。
- ・ 論文の書き方、内容に対する提案やヒントを教えてもらえた。

■ TAのみなさんからのフィードバック

- ・ 書式や文の構成が修正されている。前回の指導が受け止められていることが感じられた。
- ・ 考えることが求められる授業は、大学進学後や就職後に役に立つと思う。

<今後の改善に向けての提案>

- ・ レポート到着から指導までにもう少し時間が欲しい。
- ・ 早い段階で共通する基本事項—書式や引用の仕方、論文にふさわしくない表現(話し言葉や比喩的主観的表現など)—についての指導をしておくことで後の指導が効率的になる。
- ・ 上の学年の優秀な論文やスライドの見本を示すと、目標設定ができ、作りやすくなる。
- ・ コメントのメモが欲しいという学生が多い。事前に聞いていたら用意できた。

■ 取組を終えて

- ・ 普段の指導を補う重要な活動であると考え、生徒の論文の良い点を評価すること、客観的に見てわかりにくい所を指摘することなど、担当教員の指導で漏れていた部分を補っていただいている。
- ・ 指導の方法についても第三者として率直な提案をもらい、指導の改善に活かしている。
- ・ 以上のような効果的なチーム・ティーチングができており、ぜひ継続していきたい。

(11) 2年生対象 ニューヨーク研修 ～Diversity と Inclusion について学ぶ

■実施日 1月2日～7日

■形態 2年生を対象に参加希望者を募り、研修の参加実績と課題エッセイ（日本語及び英語）の総合評価により12名を選抜して実施した。事前指導と事後指導を各5回行い、学習成果発表会「千里フェスタ」において参加者全員が英語で研修の成果を発表した。

■ねらい

- ① 多様性を受容する社会・職場づくりの最新の動向と取組みについて学ぶ。
- ② 人権擁護団体ADLによるワークショップを通し、アメリカがジェンダー・人種・民族による偏見や不平等をどう克服しようとしているかを体感する。
- ③ 国連グローバル・コンパクトが取り上げる環境・人権・労働・腐敗防止について、1) 課題研究「探究」を進める中で生じた疑問に対する答えを得、2) アメリカ国内および世界規模で現在焦点となっている課題を学び、研究を日米比較や世界規模の文脈に位置づける。
- ④ 移民の歴史を知ることによって、現在のアメリカ社会の多様性に対する理解を深める。

■実施の詳細

さらに詳しくは、生徒の手による英文レポートを下記 Web サイトに掲載しています。

<http://senrisgh.blogspot.jp/2017/03/blog-post.html>

1月2日（月）

午前：大阪発

午後：ニューヨーク着

【米国の近現代史を知る研修】ブルックリン・ウォール街・グラウンドゼロ訪問

1月3日（火）

午前：【米国の Diversity and Inclusion を知る研修】

We Work 社共同利用オフィスビルにある会議スペースにて

①Market place の現況について、marketing consultant Jeff Bowman 氏による講義

②社会の全体状況について、オピニオンリーダーTanya Odom 氏による講義

午後：【コロンビア大学構内見学】

【国際公務員の仕事についての研修】

元国連職員の沼田隆一氏による講義

1月4日（水）

午前：【多様性と偏見に関するトレーニング】

Ant-Defamation League New York オフィスにて

ADL トレーナーによるワークショップ

午後：【国連本部見学】

本部内各会議場と国連の取組みについて、英語での解説を受けながら見学

1月5日（木）

午前：【民間企業における Diversity and Inclusion の取組み例を知る研修】

世界最大の決済システム提供会社 DTCC 会議室にて

①同社 Global Diversity and Inclusion 担当役員の Nadine Augusta 氏による講義

②Tanya Odom 氏による研修のまとめの講義と課題の提示

午後：【アメリカへの移民の歴史を知る研修】

①MOCA (Museum of Chinese in America) にて、

中国からの移民の歴史を英語での解説を受けながら見学

②TENEMENT Museumにて、

ヨーロッパからの移民の歴史を英語での解説を受けながら見学

【研修を振り返り行動計画を考えるミーティング】

1月6日（金） 午前 ホテルチェックアウト・ニューヨーク発

1月7日（土） 夜 大阪着

■参加生徒の感想

- ・ ニューヨークという、多様性を大切にしている町で実際に diversity and inclusion という分野のエキスパートの方々に意見やお話を聞くという経験だった。大きく価値観も変わったし、何より日々世界中で起きている様々な出来事を今まで自分が持っていなかった diversity and inclusion という観点から見るようになったと感じている。
- ・ 実際にさまざまな人種の人がいる地で多様性を感じることができ、物事を色々な方向から見ることができるようになったと思う。また、自分とは違った文化を持った人を積極的に理解し尊重できるような考えができるようになった。
- ・ 偏見やアイデンティティのつながりや、多民族国家のアメリカで企業がどのようにそれに取り組んでいるのかを知り体験することによって、違いがあってもどのように理解し行動すべきなのかを学ぶことが出来た。
- ・ 現在の企業の取り組み方について学んだことが起業に興味を持つ僕にとって参考になった。
- ・ 学んできたことをわかりやすく他の人に伝える発表能力が身に付いた。また、多様性のなかでどういう振る舞いや考え方で生きるべきかを考えられた。
- ・ 異なった考え方もつ人と触れることにより、自分の見ている世界がガラリとかわり、今までとはまったく異なる視点で物事を考えることができるようになったと思います。
- ・ 自分自身と向き合っ、将来のことや日本に帰ってからどのようなアクションをとりたいかを深く考えることができたと思います。

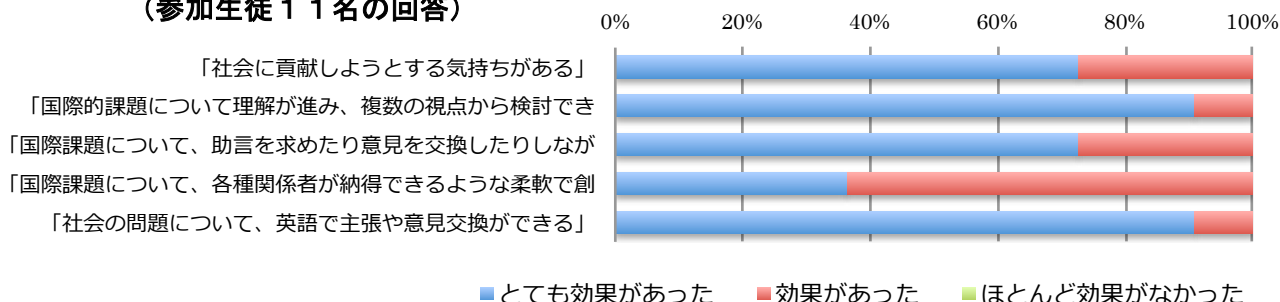
■取組を終えて

- ・ 研修中から帰国後の報告についてのミーティングを重ねることで、チームとして報告のプレゼンテーションを用意してもらった。研修内容をていねいに伝えた上で自分たちのメッセージを述べる、また、全体としてまとまりのある質の高い報告ができた。
- ・ 今後は、課題研究で取り組んでいる国際的な課題について自分たちの意見や提案を提示し、米国における状況や、国際的な取組との関係について紹介してもらったり、あるいは提案に対して問題点を指摘したりしてもらおうなど、さらに踏み込んだ内容の研修ができるように計画していきたい。

■目標への寄与度

この研修は本校SGHの目標に対し、どの程度効果があったと思いますか。

(参加生徒11名の回答)



(12) 1,2年生対象 学習成果発表会「千里フェスタ」の概要と「探究」の発表



代表発表



探究セッション



SGH 海外研修報告会

■実施日 2月9日, 10日, 13日

■形態 1,2年生を対象に、1日目は、音楽の発表と基調講演、学年別活動、2日目は、課題研究「探究」・「探究基礎」・「科学探究」・「科学探究基礎」の発表、及び「SGH海外研修」・「台湾科学研修」の発表等を分科会形式で、3日目は、2日目とほぼ同内容を一般に公開して行った。3日目は、1年生の日本語でのディベート、2年生の英語でのディベートが加わる。

「探究」の発表について

■形態 講座内発表の評価により、各講座から「代表発表」をする1名(組)・「探究プレゼン」をする3名(組)を選出し、その他の生徒は「探究セッション」形式で口頭発表する。

■ねらい 課題研究を、聞き手を意識した質の高いものにする動機を与える。
研究成果を共有することで刺激を受け、意見の交流を楽しむ。

■実施の詳細

- ・ 「代表発表」の生徒は、大教室で発表し、3日目はコメンテーターからコメントを受ける。
- ・ 「探究プレゼン」の生徒は、普通教室で発表する。
- ・ 「探究セッション」の生徒は、普通教室で7名の1年生に対して発表する。この形式は、全研究が発表できるようにするため、昨年から導入した。発表者と聞く生徒との距離が近く、質問や意見を交換しやすくなることも期待した。

■取組を終えて

- ・ 探究セッションは、発表者と参加者の距離が近く、独特の雰囲気意見交換もしやすいという長所もあった。試みに参加者全員が発表後にコメントするようにしたところ、活発に質疑がなされていた。このルールを徹底することでこの会場ならではのセッションが期待できる。
- ・ 昨年度から2年生は課題研究を全て発表することにした。ゴールがそろい、研究の質を最後まで高める動機づけになっていると思われる。

■研究題目一覧

巻末に全ての研究題目を掲載している。

(13) 国際文化専門科目：課題研究を支え、英語コミュニケーション力を高める

グローバルな問題に取り組む基礎的認識を身につける1年「国際理解」と調査し討議する英語力を育成する2年「グローバル・コミュニケーション」・3年選択科目「トピック・スタディズ」・「グローバル・スタディズ」を紹介する。

① 1年「国際理解」**■目標**

最終的な目標は、「グローバルに活躍できる人材の育成」というところにあります。とはいえ、この授業を受ただけで、いきなり世界で活躍できる力が身につくというほど簡単なものではありません。グローバルに活躍できる力を身につけるためには、まずその視点を持つ必要があります。ですから、「グローバルに展開する現代の世界に目を向ける動機づけ」が、この授業の具体的な目標ということになります。

■授業形態：

1週1時間、クラス単位の授業で、社会科の教員が授業を担当しています。

■指導の過程

前半は主に、世界史の図表や地図帳などを用いて、東アジアや中東、ヨーロッパ世界の歴史と現代を概観することに時間を使いました。現代世界のさまざまな事象が時間的・空間的なつながりの中にあることを感じ取ってもらうためです。

後半は、開発教育の教材を多く取り入れ、グループごとに意見交換をおこなったり、クラスの前で発表したりする授業を行いました。例えば「食糧問題を解決するためのアクションプランの考察」や「30年後の地球社会」・「地球規模の課題に対して自分ができること」などについて考え、発表してもらいました。

また、6・7・9月には特別講師を招き、新たな視点を与えていただきました。そして、それらの終着点として、千里フェスタでドキュメンタリー映画『バレンタイン一揆』を鑑賞しました。

■生徒の受け止め

この映画を観た感想の中に、この一年の「国際理解」の授業が目指したものが集約されています。結びとして紹介します。

・「これからは調べて学ぼうと思う。それで自分にもできることがあればやろうと思う。」

・「私は高校で世界について調べ、知ることが多くなりました。そして、知るたびに本当に大変なことが起きていることがわかって、苦しかったです。私もいつか問題解決に協力したいです。」

② 2年「グローバル・コミュニケーション」**■目標**

生徒全員が英語でディベートをできるようになることです。

■授業形態

テキストPros and Consは社会問題や時事問題を把握する導入教材として使用します。授業では主にオリジナルの教材を使用しています。授業は全て英語で行われます。オリジナル教材も英語です。

■指導の過程

ディベートに必要な様々なスキル(意見表現・意見交換・要約・リサーチ力・説得力・批判的思考力・論理的思考力など)を段階的に学べるように計画を立てています。個々の授業で修得すべきスキルを明確に設定し、ステップアップしていく授業内容です。1つ1つのスキルを各レッスンで身につけ、最終的にディベート力を身につけるカリキュラムとなっています。

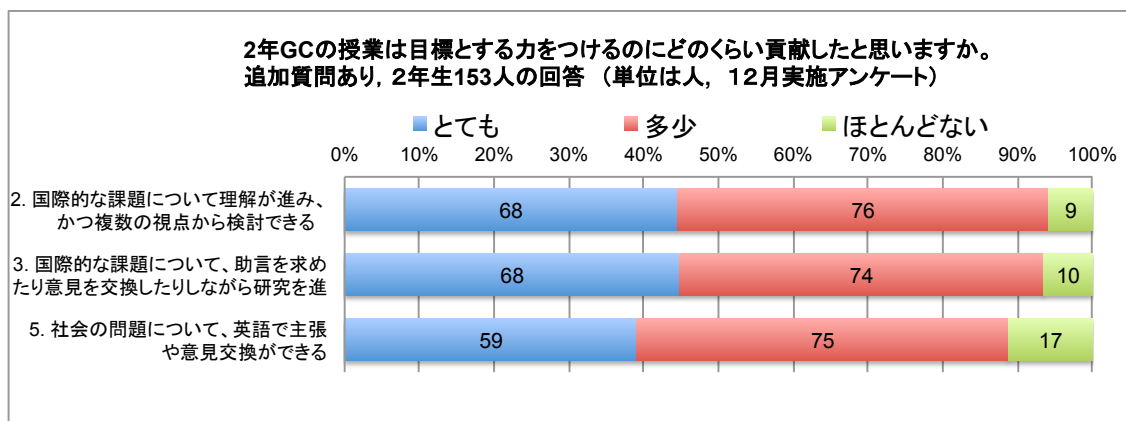
年度後半の授業では、ディベートを行います。様々なトピックについて、賛成・反対の立場に分かれ、グループで協力して根拠をあげ、データを集め、意見をまとめ、対戦します。実際のディベートにおいては、互いの議論を理解し、その場で反論し質問する力も求められます。2月の千里フェスタでは、選ばれた生徒

がディベートの公開対戦に出場します。

■生徒の受け止め

この授業は生徒一人一人の考える力と積極的な取り組みが必須ですので、生徒はアクティブな姿勢で授業に参加しています。また、目標としているスキルによっては様々なゲームなどを楽しみながら力をつけていきます。生徒は積極的に学ぶことを楽しみながら英語を自分のものにしていきます。

■目標への寄与度



③ 3年選択科目「トピック・スタディズ」

■目標

難民、貧困、宗教、環境等、国際社会における今日的な諸問題を、英語のレポートやビデオを活用して学ぶこと、またエッセーライティング、プレゼン、ディスカッション等を通して解決策や自身の考えなどを表現する方法を学ぶこと、これらを通して批判的思考を英語で展開する力を身につけることです。

■授業形態

日本人教員一名と英語ネイティブの教員一名がチームティーチングを行っています。新聞記事、ウェブ上の各種レポート記事や動画、招待講演等を教材として使っています。

■指導の過程

【前期】週2回の授業を曜日で分けて2種類の活動をします。

a) 英語のレポートやビデオを活用して学び、それらに関するエッセーライティング、プレゼン、ディスカッション等をします。1テーマに大体3時間ずつかけます。テーマによっては有識者を講師として呼んで来ることもあります。学んだテーマについてエッセーを書くことが宿題になります。

b) 生徒が順番にプレゼンをします。2,3人のグループで、1時間に2グループが発表します。テーマは1順目:自分達が選んだ国の現状のレポート(その国のポジティブな要素とネガティブな要素)、2順目:国連の機関や活動のうち自分たちで選んだテーマ(例:国連総会、常任安保理事国、UNICEF、UN for Women、日本と国連の関係等)です。各プレゼン後に質疑応答と教員からのコメントがあります。特に質疑応答の時間に生徒同士が議論する活動を重視しています。

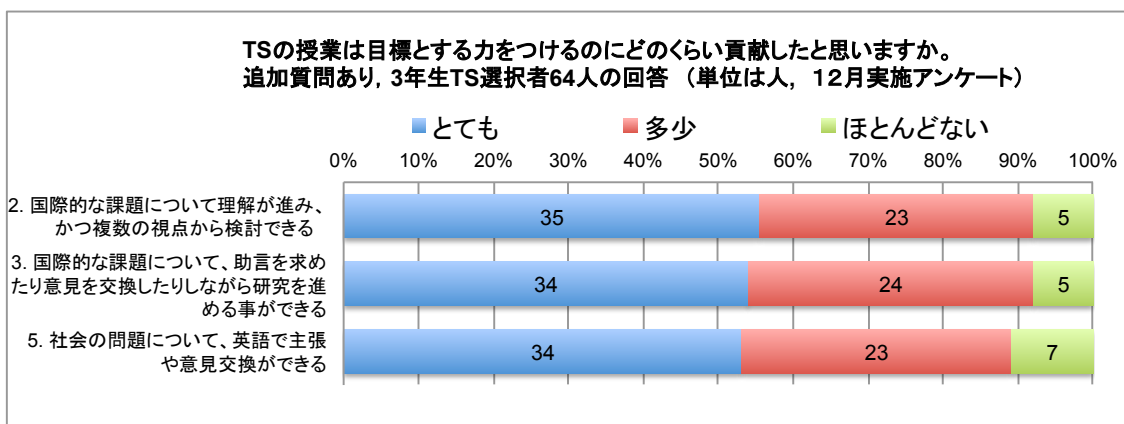
【後期】模擬国連とその準備を行います。学んできたテーマの中から国連で議論したいテーマを生徒が選び、次にそのテーマにふさわしい国が生徒2,3人のグループ毎に割り当てられます。生徒はその国の実際の立場や主張に従いつつ、新たな解決策を国連の場で提案します。各国がプレゼンを行った後で、各案について採決を取ったり、修正案を出して全会一致を目指します。

■生徒の受け止め

初めのうちは、内容が高度なため、課題をこなすだけで精一杯、プレゼンも用意したものを読んでいただけという生徒が多くなります。しかし、回数をこなし、教員の指摘を受けるにつれて徐々に向上していき、最終的には模擬国連の場で非常に高度な議論にまで至ることもしばしばあります。それまでこなした課題とプレゼンのおかげで、生徒全員が、少なくとも英語でプレゼンをし、質疑応答するのが当たり前という雰囲気

なっています。より良い内容を求めて良く努力・工夫をしていて、英語力に不安があった生徒が年度後半に伸び、感心させられることがよくあります。

■ 目標への寄与度



④ 3年選択科目「グローバル・スタディズ」

■ 目標

TOEFL iBT のスコアアップを第一の目標としています。また、ディスカッションをリードする Discussion Facilitation ができるようになることも最終的な目標としています。

■ 授業形態

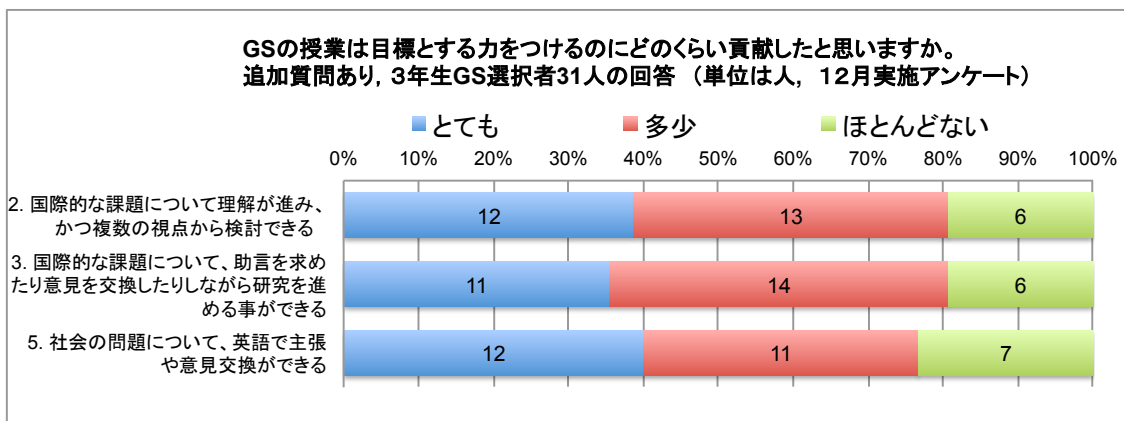
Barron's 出版の TOEFL Strategies and Tips と Barron's Writing for the TOEFL iBT の 2 冊とオリジナルの教材を使用しています。授業は全て英語で行われ、教材も全て英語です。

■ 指導の過程

授業内容は TOEFL 対策だけではなく、英語5技能(Reading, Listening, Speaking, Writing, Thinking)を総合的に習得できるように授業を計画しています。英語で入ってきた情報を自分の中で消化して理解し、それを自分の考えと照らし合わせながらディスカッションする、というプロセスを通して、概要を把握する力、要約する力、パラフレーズ(言い換え)スキル、自分の意見を分析するスキル、意見を表現するスキルを身に付けていきます。また、クリティカルシンキング・クリエイティブシンキングの基礎も授業に含み、論理的思考力、アイデア力、想像力を高めます。

授業は大学のセミナーのように生徒自身がクラスを作っていく形式です。生徒それぞれが準備したディスカッショントピックや質問を主にして授業を進めます。考える力はもちろん、人と意見を交換しディスカッションを行うことでさらに新しい考え方、アイデアを形成することへと導いていけるようにトレーニングします。

■ 目標への寄与度



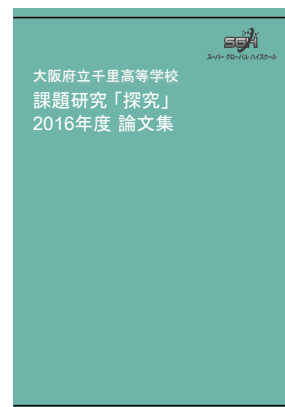
(14) 成果の普及

① SGH ホームページ

構想・実践報告・運営に関する記事を英日対訳形式で掲載したホームページを企画・作成した。

また、活動速報をブログに掲載した。

下記②～④の資料も順次このホームページの「活動記録」-「運営」のカテゴリで公開する。



② 実践レポート

具体的な実践の様子を紹介することを主眼にした冊子『共有と前進のための SGH 研究開発実践レポート 2016』を作成し、SGH 校並びにアソシエイト校に送付した。

③ 論文集

2年生の課題研究の 107 研究の中から 27 論文を選んで掲載した論文集を作成した。

④ 1年生向け課題研究テキスト

授業で用いたワークシート『探究通信』を冊子にまとめ、テキストを作成した。



(15) SGH 運営指導委員会：助言を中心に

10月と2月の2回運営指導委員会を開催し、外部有識者からの助言を受けた。同様の取組をされている他校にも役立つものと思われるので、助言部分を詳しく紹介する。

① 平成28年度 第1回運営指導委員会

日時：平成28年10月21日 11時35分～12時40分

場所：千里高校 校長室

出席者：

○運営指導委員

久 隆浩 委員 近畿大学 総合社会学部 環境系専攻 教授

藤本 英子 委員 京都市立芸術大学 美術学部 教授

朝田 秀俊 委員 吹田市立竹見台中学校 校長

北村 素子 委員 大阪府教育センター 高等学校教育推進室 主任指導主事

松下 信之 委員 大阪府教育センター 高等学校教育推進室 指導主事

○管理機関・大阪府教育庁

若林 博行 教育振興室 高等学校課 教務グループ 指導主事

○千里高校

松本 透 校長／堀辺 慶一 教頭／大西 千尋 首席(SGH 事業推進主担当・英語)／松井 活夫 教諭(SGH 委員・「探究」「探究基礎」主担当・国語)／近澤 一友 教諭(SGH 委員・「探究」「探究基礎」「国際理解」担当社会)／野村 真理 教諭(「探究」担当・英語)／江口 拓馬 教諭(「探究」担当・国語)



指導助言の主な内容：

①代表の中間発表

1. 【生徒間で研究の交流】多様で興味深い視点からテーマを取り上げられているが、コメントが一方的である。生徒同士のディベートの機会を作ることが有効。近いテーマの仲間で情報交換すると良い。
2. 【現場とのつながり】地元の行政との連携や先進事例の見学があると、研究が現実的なものとなり、パワーも得られる。例えば、地元でも児童虐待の事例があり、子ども家庭センターとの連携が欠かせない。また、自治体の広報に対しての提案は、ぜひ担当にフィードバックしてあげてほしい。
3. 【結論を急がない】一定論理的な形になっているが、結論に厚みが足りない。複数の情報源からいねいに情報を収集・整理して厚みのある研究にするのがよい。結論を急いでうまくまとめる必要はない。卒業しても問題への関心を持ち続けてほしい。
4. 【先行研究】を調査、整理した上で、自分の研究の目的を設定するようにする。
5. 【個々の発表に関して】先進事例の見学に行くことで研究のパワーが得られる。／情報の出所・年度を忘れずに示す。／市民が取り組めることを考えているのはよい。／発表のスライドの見やすさ、発声の明瞭さ、態度の明るさは重要。よくできている発表も、もう一歩という発表もあった。／ファストファッションの研究は、身近な疑問から世界を学べるいい研究。リサイクルやリユースの視点も持ってほしい。

②課題研究以外の科目の教育

- ・ 英語の指導方法：理解した内容について英語で発表するのは効果的。CLIL(Content and Language Integrated Learning, 内容言語統合型学習)について検討を。
- ・ 他の教科への影響：他教科における教員・生徒への積極的な影響についても目を向けると良い。
- ・ 知識の総合化：大学では、科目全体の体系化を試みている。知識を総合化して問題に対応していくという学問・学習の姿勢だ。そのため、例えば、図書館ではテーマ別の配架をしている。このような教育フレームの変更は労力を必要とするが、生徒の変化を引き出すためと考えると取り組んでいる。フェイスブックなどを利用して卒業生のネットワークを活用することも検討すると良い。

③評価

- ・ できれば量的なエビデンスを示す。SGH・各教科について、ポリシーに定める力を身につけて卒業させているかどうかを計測するようにデザインする。大学では知識・英語力・国語力について、入学直後と卒業時にテストをして差を計測している。

② 平成28年度 第2回運営指導委員会

日時:平成29年2月13日 12時20分～13時20分

場所:千里高校 校長室

出席者:

○運営指導委員

久 隆浩 委員 近畿大学 総合社会学部 環境系専攻 教授

藤本 英子 委員 京都市立芸術大学 美術学部 教授

北村 素子 委員 大阪府教育センター 高等学校教育推進室 主任指

○管理機関・大阪府教育庁

若林 博行 教育振興室 高等学校課 教務グループ 指導主事

○千里高校

松本 透 校長／堀辺 慶一 教頭／大西 千尋 首席(SGH 事業推進主担当・英語)／松井 活夫 教諭(SGH 委員・「探究」「探究基礎」主担当・国語)／近澤 一友 教諭(SGH 委員・「探究」「国際理解」担当社会)／野村 真理 教諭(「探究」担当・英語)／村上 晃 教諭(SGH 委員・「探究基礎」・「国際理解」担当・社会科)／二井三喜夫教諭(「探究」担当・社会科)／江口 拓馬 教諭(「探究」担当・国語)



指導助言の主な内容

①研究発表

- ・すぐに提案ではなく、自分に何ができるかを考えたり、呼びかけを行ったりしているのがよい。
- ・話し方が、スピード・明瞭さの点で、わかりやすい。
- ・発表されていた研究に関わる事例が地元がたくさんある。子育て支援に学生ボランティアを活用するという提案をしていたが、東淀川で学生ボランティアを活用する取組もすでにある。ぜひ取材に。

②全校化

- ・そこに行けば「探究」で何が行われているのかがわかる「場所」があることは重要。
- ・「今こんな手助けが欲しい」と発信して、資源を持っている先生を生徒が巻き込んでいくのがいい。そういうつながりが増えていくと、課題研究で何をやっているのかが全体に見えるようになる。
- ・先生全員が自己紹介を生徒に公開するのも一つの方法だ。大学での専攻や興味をもっていることがわかると、相談にのってもらいやすくなる。
- ・チーム指導を発展させるには、話し合う機会を増やすしかない。じっくり話して情報交換する。これを繰り返すと自ずとビジョンが共有される。SGHはチームビルディングのきっかけだと考えると良い。
- ・「そう言われれば、こんな生徒の変化があった」といったことを拾い上げることは重要。

③評価

- ・個人の自己評価シートがあると良い。それを見て、ここが足りないなと感じた時に相談できる。
- ・勤務している大学では、まず学生が自分で目標を書き、担当が相談に乗り一緒に設定する。そしてその後は、半年ごとに進捗を確認し、助言する。
- ・クリアファイルを使ってポートフォリオを作る方法も良い。学習の歩みを記録し、見返すことができる。
- ・「この生徒はこう変わった」ということがわかるストーリー／エピソードも、説得力がある。
- ・アンケートの文章分析(テキストマイニング)という手法もある。
- ・できていないことをきちんと書き出すことで、要因分析をし、対策が立てられる。PDCAには、重要。
- ・グローバルリーダーを育てられたかどうかを評価するのは難しいことだが、試案を立てて評価を試みることで見えてくる事がある。評価法を評価するという姿勢で試みてもらいたい。

④サステナビリティ

- ・来年は千里フェスタ「学習成果発表会」を土曜日に開催するのなら、広く同窓生に呼びかけるとよい。卒業生はどんなことをやっているのかに興味があるので来る人も多いただろう。そこで必要な情報を持っている人が見つかるかもしれない。卒業生とのつながりを活性化して学校の資源として活用する試みを「ホームカミングデー」と名付けて行っている大学も多い。

(資料①) 国際文化科今年度入学生の教育課程表

平成28年度大阪府立千里高等学校 国際文化科 教育課程実施計画(50期生)

(入学年度別、類型別、教科・科目等単位数)

入学年度		H28 (2016)										計	備 考
学年		Ⅰ 年				Ⅱ 年		Ⅲ 年					
教科	科目	通年		前期	後期	通年		通年		前期	後期		
		共通	選択	共通	共通	共通	選択	共通	選択	選択	選択		
国語	国語総合	5										13~17	
	現代文B					2		2					
	古典B					2		2					
	(学)現代文演習									+1	+1		
地理歴史	(学)古典演習									+1	+1	4~8	
	世界史A					2							
	世界史B							*2					
	日本史A					*2							
	日本史B							*2					
	地理A					*2							
	地理B							*2					
	(学)世界史演習									+1	+1		
(学)日本史演習									+1	+1			
公民	(学)地理演習									+1	+1	2~6	
	現代社会	2											
	倫理									+1	+1		
数学	政治・経済							*2				11~15	
	(学)政治経済演習									+1	+1		
	数学I	3											
	数学II					3							
	数学A	2											
	数学B					3							
理科	(学)数学II B演習									+1	+1	7~20	
	(学)数学演習									+1	+1		
	物理基礎					△3							
	化学基礎	2					#3		◇2				
	化学												
	生物基礎					△3							
	生物									+2	+2		
	(学)理科演習									+1	+1		
体育	(学)化学演習									+1	+1	10	
	(学)生物演習									+1	+1		
芸術	体育	3				2		3				2~6	
	保健	1				1							
	音・美・書I	2					#2						
外国語	音・美・書II											0	
	音・美・書III									+1	+1		
家庭	家庭基礎	2										2~3	
情報	(学)生活科学						#1					2	
英語	社会と情報			1		1						2	
	総合英語	5										15~23	
	異文化理解					2		3					
	時事英語						◇2						
	(学)トピック・スタディズ								◇2				
	(学)ライティング・スキルズ					2		2					
	(学)リーディング・スキルズ									+1	+1		
	(学)LL速読演習					1							
(学)英語語法演習									+1	+1			
国際文化学	(学)グローバル・スタディズ								◇2			6~10	「(学)英語以外の外国語研究」は、中国語、韓国・朝鮮語、フランス語、ドイツ語、スペイン語から選択
	(学)英語以外の外国語研究						◇2		◇2				
家庭	(学)国際理解	2				2		2				0~2	
家庭	(学)国際理解						◇2		◇2				
家庭	課題研究									+1	+1	0~2	
教科・科目の計		31	0	1	0	28	5	16	2	7	4~7	94~97	
ホームルーム活動		32		33		29~32				3			
総合的な学習の時間		1		1		1				3			
総合計		2		1		0				3	国際理解(1年)、探究基礎(1年後期)、探究(2年)、志学		
選択の方法		2年、*から1科目2単位、△から3単位、#から3単位 ◇から1科目2単位 3年、*から1科目2単位、◇から2単位。 選択群から前期7単位、後期4~7単位選択										100~103	

(資料②)「探究」研究題目一覧

①講座「企業と人権・労働・環境」

- 1) 日本企業はどう難民と向き合っていくべきか
- 2) ファストファッションの問題を軽減するために企業がで
きることは
- 3) 女性が働きやすい社会をどうやったら作りあげられる
か
- 4) ファストファッションブランドの服はなぜ安いのか
- 5) サプライチェーンの低炭素化を実現するためには
- 6) 外国人技能実習制度をどのように改革すべきか
- 7) 児童労働をなくすためにはどうすればよいのだろうか
- 8) 強制労働を誰も傷つけずになくすことはできるのか
- 9) UNIQLO の下請け工場の実態～労働問題はどのよう
にして改善されるのか～
- 10) 中国の労働状況とは
- 11) 企業と環境対策
- 12) 日本の企業がブラックなワケ
- 13) ファストフード企業の問題点
- 14) ファストファッションはなぜ安い？
- 15) 中国の大気汚染について～人体と環境に及ぼす影響

②講座「環境 ～私たちを取り巻く様々な事象」

- 16) 小笠原の自然を守るためにどうすればよいか
- 17) 富士山が永遠に世界遺産であるためにはどのようにす
ればよいか
- 18) 日本人に有効な教育方法とはどのようなものか
- 19) 10年後の100円ショップはどうなっているか
- 20) 琵琶湖の生物を救うためにはどうすればよいか
- 21) なぜ再生可能エネルギーは普及しないのか
- 22) 日本の若者の自殺を予防するには～精神面からのア
プローチ～
- 23) 原子力発電所を再稼働すべきかどうか～各新聞社の
比較～
- 24) 土佐くろしお鉄道の利用者を増やすためにはどうすれ
ばよいか
- 25) 万博記念競技場のバリアフリーは進んでいるのか

- 26) 日本フードマイレージを減らすには？
- 27) 日本のツキノワグマを絶滅から守るには？
- 28) 日本のLGBT問題
- 29) 固有種を絶滅から守るためにはどうすればよいか
- 30) 女性差別をなくすためにはどうすればよいか
- 31) 詰め替え製品の新しい形とは
- 32) ごみによる地球への影響
- 33) 自動運転での事故、悪いのは運転手？車会社？
- 34) 子供世代の体育・運動能力の低下を改善するために
は
- 35) アジアのハブ空港から旅客を獲得するには
- 36) エコバッグ運動は本当にエコなのか
- 37) 言葉の乱れを改善するには
- 38) 十三商店街を活性化させるためにはどうすればよいか
- 39) 地球温暖化の原因メタンガスを減らすためには？
- 40) 伊丹空港に国際線を復活させることはできるのか？
- 41) グローバル化と日本の文化
- 42) ディズニーのキャストから学べることは何か
- 43) 東京オリンピック、パラリンピック
- 44) 日本を観光大国にするためには

③講座「世界を知ろう・世界を考えよう」

- 45) シリア難民の子どもたち
- 46) 銃をかかえた子どもたち
- 47) 環境におけるCSR ～水資源問題
- 48) インドの児童労働について
- 49) フィリピンの経済問題～学校に行けない子供たち
- 50) なぜ発展途上国の人々は飢えるのか？
- 51) なぜマンホールの下で人が生活しているのか
- 52) 世界一幸せな国”と言われているブータンは本当にし
あわせなのか
- 53) ストリートチルドレンの未来を明るくするために
- 54) 格差のむこうに見えたもの～フィリピン負のスパイラル
- 55) 働かなければならない子どもたち

④講座「男女共同参画 ～育児と仕事を両立させる

アイデアとは」

- 56) どうすれば小規模保育を有効に活用できるのか
- 57) 保育士を増やすためには
- 58) 男性が育児休暇を取得するにはどうすればよいか
- 59) ベビーシッターを普及させるためにはどうすればよいか
- 60) 保育士を増やすためには
- 61) 日本の保育士不足について～待機児童問題の解消に向けて
- 62) どうすれば保育園入園のための保活を親が安心して行えるのか
- 63) 育児休暇中の仕事離れを防ぐにはどうすればよいか
- 64) どうすれば、育休によって職場を離れる女性を減らせるのか
- 65) 育児休業制度に取り組むことの意義
- 66) マタニティ・ハラスメント～妊娠しても当たり前働ける社会を目指して

⑤講座「『教育』に関わる諸問題について」

- 67) 早期教育について
- 68) 海外と比較した日本の教育制度
- 69) 質の高い食育とは
- 70) 学力向上のために現在の教育に必要なこととは
- 71) 中学校の『荒れ』を克服するには
- 72) 学校教育に体罰は必要か
- 73) 法と教育
- 74) 義務教育で身につけさせたい『基礎学力』と、それを高めるために
- 75) 体罰を減らすために
- 76) ゆとり教育は失敗に終わったのか
- 77) 教育現場における体罰をなくすために
- 78) いじめはなぜなくなるのか
- 79) 日本の教育がつくる日本人の特徴
- 80) シチズンシップ教育の必要性和実現に向けて
- 81) 最も効率のよい勉強法とは
- 82) 働く母は子を〇〇にする？～母親の就業と子どもの学力～

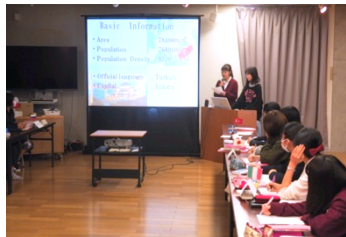
- 83) アメリカの教育と企業のつながり～日本の教育との比較～
- 84) 働く小さな手～児童労働をなくすために～
- 85) 学習意欲を向上させる教育法とは？～ビリギャルから考える～
- 86) 非行の原因とその抑制・更生
- 87) NO MUSIC NO STUDY
- 88) 子どもにとって必要な学力とは
- 89) 児童養護施設の現状から見る日本の教育制度の問題点
- 90) 教育格差について
- 91) なぜ日本人は英語がしゃべれない？
- 92) 日本の教育を良くするには
- 93) 学力格差について

⑥講座「児童虐待をなくすためにはどのような対策を講じれば良いのか」

- 94) 児童虐待を防止する為に地域で出来る取り組みとは
- 95) 児童虐待・虐待死をなくすために各機関がすべきこととは
- 96) 日本の貧しい児童福祉体制を改善するには
- 97) 児童虐待の世代間連鎖を減少させるために
- 98) 若い親達が育児に関する知識を身に付けることで児童虐待を減らすためには
- 99) 障害を持つ子供の親による虐待をなくすために
- 100) 保護者の育児に関する知識を培うにはどうしたらよいか
- 101) 経済的困難によるネグレクトを減らすにはどうすればよいか
- 102) ひとり親家庭の経済的困難による児童虐待の実態とその解決案とは
- 103) 地域単位での虐待対策
- 104) 児童虐待による世代連鎖の実態と改善策とは
- 105) 育児不安から起こる児童虐待を減らすには
- 106) 児童虐待の早期発見をするには何が出来るのか
- 107) 育児不安による児童虐待を減らすためには

発行者： 〒565-0861
大阪府吹田市高野台 2-17-1
大阪府立千里高等学校
TEL 06-6871-0050
FAX 06-6871-2587
<http://www.osaka-c.ed.jp/senri/>

発行日： 2017（平成29）年3月1日



大阪府立千里高等学校SGHサイト
<http://www.osaka-c.ed.jp/senri/sgh/index.html>